HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	関係人口における多様な関係のあり方についての考察 : 北海道厚沢部町と岩手県釜石市を事例に
Author(s)	上野, 綾
Citation	北海道大学. 学士
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/76872
Type	theses (bachelor)
File Information	2019aueno.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

令和元年度卒業論文

関係人口における多様な関係のあり方についての考察

―北海道厚沢部町と岩手県釜石市を事例に―

北海道大学　文学部　人文科学科

人間システム科学コース　地域科学研究室

指導教員：宮内泰介

学生番号：01152045

氏名：上野綾

この論文は、2019 年 12 月 16 日提出の卒業論文に修正・加筆した改訂版である。
（最終改訂日：2019 年 12 月 30 日）

目次

1 はじめに 4
1-1 研究の背景と目的 4
1-2 研究方法・調査概要 6
2 関係人口とその背景 7
2-1 関係人口とは 7
2-2 田園回帰の潮流 9
2-2-1 田園回帰とは 9
2-2-2 狭義の田園回帰 9
2-2-2-1 田園回帰以前の移住者 9
2-2-2-2 田園回帰の始まり 10
2-2-2-3 若者にとっての農村 11
2-2-2-4 田園回帰が始まった要因 12
2-2-3 広義の田園回帰 12
2-2-3-1 都市農村交流とは 12
2-2-3-2 都市農村交流の変遷 13
2-2-3-3 都市農村交流の発生・拡大要因 14
2-2-4 田園回帰と関係人口 15
2-3 よそ者の必要性 15
2-4 移住における課題 16
2-5 まとめ 19
3 北海道厚沢部町の事例 20
3-1 厚沢部町の概要 20
3-2 厚沢部で関係人口を生む「農楽会」 21
3-2-1 農楽会の概要 21
3-2-2 農楽会の設立と変遷 22
3-2-3 農業アルバイト生の１日 23
3-2-4 参加のきっかけとその理由 25
3-2-5 なぜリピーターが生まれるのか 31
3-2-5-1 リピーターからみる農楽会 31
3-2-5-2 農家さんとの関係 31
3-2-5-3 共同生活や環境の魅力 32
3-2-5-4 新しいものが生まれる 34
3-2-5-5 地域との関係 35
3-2-5-6 荒木敬仁さんの存在（農業アルバイト生と農家さんの間に立つ存在） 36

3-2-5-7 まとめ..... 38
3-3 考察..... 39
4 岩手県釜石市の事例..... 41
4-1 釜石市の概要と歴史..... 41
4-1-1 釜石市について..... 41
4-1-2 鉄の歴史..... 42
4-1-3 津波の歴史..... 43
4-2 関係人口期間から移住に至るまで..... 43
4-2-1 聞き取り対象者について..... 43
4-2-2 交流の中での関係性..... 45
4-2-2-1 ある漁師さんとの出会い（秋本純希さん）..... 45
4-2-2-2 ボランティア活動による人間関係の広がり（佐藤啓太さん）..... 46
4-2-2-3 こすもす公園という特別な場所（深澤鮎美さん）..... 47
4-2-3 長期滞在の中での変化..... 49
4-2-3-1 子どもたちと関わりたい（岩城一哉さん）..... 49
4-2-3-2 緊急支援から移住へ（佐藤奏子さん）..... 51
4-2-4 岩手への関心..... 52
4-2-4-1 暮らしや文化への関心（細江絵梨さん）..... 52
4-2-4-2 一次産業への関心（手塚さや香さん）..... 53
4-2-4-3 自分のルーツと移住の模索（福田学さん）..... 54
4-2-5 関わりの可能性..... 55
4-2-5-1 高校生のプロジェクトに関わる中で（由木加奈子さん）..... 55
4-2-5-2 釜石の余白への気づき（今井のどかさん）..... 56
4-3 考察..... 58
5 まとめ..... 62
6 おわりに..... 64
7 参考文献・参考 URL..... 65

1　はじめに

1-1　研究の背景と目的

日本では少子高齢化が大きな社会問題となっている。現在の総人口は 1 億 2,625 万人（高齢化率 28.3%[1]）だが、2040 年には 1 億 1,092 万人、2053 年には 1 億人を割り 9,924 万人になると推測されており、高齢化率も、2036 年には 33.3%、2065 年には 38.4%にまで上昇すると予測されている[2]。また都道府県別の人口においては、2015 年から 2020 年にかけて 42 道府県で人口が減少、2020 年から 2030 年にかけては、東京都及び沖縄県以外の 45 道府県で人口が減少するとの予測がある[3]。そして今、このような少子高齢化問題に最前線で対峙しているのは、過疎化が進行している地域である。過疎について、安達生恒（1970）は「農村人口と農家戸数の流出が大量かつ急激に発生した結果、その地域に残った人びとの生産と社会生活の諸機能が麻痺し、地域の生産の縮小とムラ社会自体の崩壊がおこること」と定義している。また小田切徳美（2009）は、過疎によって「人」「土地」「むら」の空洞化が進み、地域住民がそこに住み続ける意味や誇りを見失う「誇りの空洞化」が生じていることを問題だと指摘している。まさに過疎化とは、社会減と自然減による地域の担い手不足によって、地域社会が維持できなくなり、その地域への誇りまでもが失われていく現象のことである。そして、目に見える「人口」という数値だけではない部分までもが、蝕まれてしまう。2014 年に発表された「増田レポート[4]」は、過疎化の先にある地方自治体の「消滅」が、遠い先の話ではなく、今まさにその危機が差し迫っていることを地方自治体に示した。増田レポートに対して様々な批判や議論はあるものの、このような可能性が示されるほど、地方はその存亡の機に瀕しているのである。

歯止めの効かない人口減少の一方で、各地方自治体も人口維持のため、様々な施策を打ち出している。近年の「田園回帰」と呼ばれる、地方の自然に囲まれた環境への関心の高まりもあり、移住者が増え始めた地域もある[5]。しかし、移住はあくまで地方圏全域で平均的に見られるわけではなく、特定の市町村や特定の地区において、限定的に増加しているというのが現実である（作野，2016）。

移住者数は伸び悩んでいる一方、都心で生まれ育ち、「ふるさと」と呼べる地域がないと感じている「ふるさと難民」などは、人と人とのつながりの強い地域への憧れを抱いている

---

[1] 2019 年 6 月 1 日時点での人口（総務省統計局,https：//www.stat.go.jp/data/jinsui/new.html より 2019/12/08 閲覧）。
[2] 国立社会保障・人口問題研究所,「日本の将来推計人口（平成 29 年推計）」より。
[3] 国立社会保障・人口問題研究所,「日本の地域別将来推計人口（平成 30 年推計）」より。
[4] 増田レポートとは、2014 年に「日本創生会議」人口減少問題検討分科会が 2040 年までに全国 896 市町村が消滅する可能性があると発表したものである。東京大学大学院客員教授の増田寛也が検討分科会の座長を務めたことから、「増田レポート」と呼ばれる。
[5] 例えば、北海道東川町は 1994 年に 6,973 人だった人口が 2015 年には 8,105 人になるなど、約 20 年で人口が約 14%増加している（玉村雅敏・小島敏明編,2016,『東川スタイル：人口 8000 人のまちが共創する未来の価値基準』産学社 より）。

（田中, 2017）。地域と深く関わり、その地域の担い手になるには、その町に移住し、その町の住民になるしかないと考えがちである。しかし、移住は難しいが地域には関わりたいと考える人たちが、住む場所を変えることなく地域と関わっていければ、地域と交流するハードルも下がる。そして、自治体同士で移住者誘致合戦とならずに済むのではないだろうか。このような考え方が近年、「関係人口」と呼ばれている。

国土交通省「住み続けられる国土専門委員会」においても、関係人口の拡大・深化を目的とした施策を提言している。さらに、政府は「まち・ひと・しごと創生会議」で 2020 年度からの地方創生の新たな戦略に、関係人口の拡大を組み込む方針を示した[6]。このように「関係人口」という言葉は地方創生のキーワードになっている。

2018 年度から総務省では、「関係人口創出事業」が始まっており、2019 年度には採択された 36 団体が、関係人口創出のモデル事業を行っている。その地域にルーツがある者、ふるさと納税の寄付者、これから地域との関わりを持とうとする者を対象とした事業、都市部において都市住民等の地域への関心を高めるための取り組み、外国人との交流を促進する取り組みなど、様々な事業が展開されている[7]。

しかし、個人の視点で考えた場合、地域に関わることそれ自体を目的として、人は地域と関わるのだろうか。中には、都会から離れ、見ず知らずの地域に関わりたいという者もいるだろう。しかしながら、人々はその地域の地理的な空間を目指すのではなく、地域内に目的があり、その目的を達成するために地域に訪れるものではないのだろうか。小田切徳美（2017）が関係人口を「地域に関わる多様な人々」と定義するように、関係人口とは地域と様々な「関係」を結んでいる人々である。

よって本研究では、関係人口の「関係」に着目し、「関係人口」にあたる個人が、地域の何と関係を持ち、何が継続的な関係や移住につながるのかを明らかにし、またそれらによって、関係人口とは何なのかについて再考することを目的とする。

以上を明らかにするために、まず第 2 章で、なぜ今関係人口がこれほど注目されているのか、その背景や要因について詳述していく。第 3 章では北海道厚沢部（あっさぶ）町の関係人口、第 4 章では岩手県釜石市の関係人口から移住に至った人を対象とした、聞き取り調査の結果をまとめていく。そして、第 5 章で 2 つの事例から関係人口の「関係」について考察する。

---

6 時事ドットコムニュース,「地方創生へ『関係人口』拡大＝先端技術活用も－政府基本方針案」
https：//www.jiji.com/jc/article?k=2019061100878&g=pol より（2019/12/08 閲覧）。
7 それぞれの地域の具体的な取り組みに関しては、総務省「関係人口創出事業」HP
http：//www.soumu.go.jp/kankeijinkou/model_list.html　を参照していただきたい。

1-2　研究方法・調査概要

本研究では、文献調査とフィールド調査を行った。フィールド調査では、聞き取り調査と参与観察の手法を用いた。また聞き取り調査は、北海道厚沢部町と岩手県釜石市にて行い、参与観察は北海道厚沢部町でのみ行った。

北海道厚沢部町では、農業アルバイト生を毎年受け入れている「農楽会（のうらくかい）」を対象とし、調査した。農楽会の特徴は、参加者の高い満足度と口コミによって参加者が全国各地から集まっているところにある。また、農業アルバイトをしながら、車の運転免許や狩猟免許を取得することも可能である。2019 年 6 月 15 日から 16 日に農楽会事務局の荒木敬仁さんに受け入れ体制や農楽会設立の経緯を、農楽会所属の農家さん 3 名にアルバイト生の受け入れや交流についてお聞きし、狩猟免許の講師を務める猟友会の方 1 名にも話を伺った。さらに 2019 年 8 月 24 日から 2019 年 9 月 1 日まで厚沢部町に滞在し、農家さん 8 名に受け入れの話を、農業アルバイト生 10 名に参加のきっかけや厚沢部での生活などについてインタビューを行った。また筆者自身も農楽会の農業アルバイト生として参加し、他のアルバイト生と同様の生活を送り、参与観察を行うことができた。

岩手県釜石市においては、2019 年 6 月 6 日から 2019 年 6 月 9 日、2019 年 9 月 3 日から 2019 年 9 月 10 日まで三陸ひとつなぎ自然学校[8]の事務所兼宿泊施設に滞在し、ボランティア活動を行いつつ、関係人口創出に関わる地元の方や移住者、関係人口期間を経て移住した人を対象に聞き取り調査を行った。特に釜石市は、東日本大震災による津波で甚大な被害を被った地域であり、そのボランティア活動やそれに関連するプロジェクトを通して、多くの人が訪れる街である。釜石市は「オープンシティ戦略」を掲げ、政府が政策として推進する以前の 2015 年度から、関係人口と同義語である「つながり人口[9]」と釜石市内の「活動人口」の力を生かす取り組みを数多く行っている[10]。このように釜石市は、関係人口創出の取り組みを一足早い段階で始めている。

厚沢部町と釜石市という全く異なる事例における関係人口を調査した理由は、関わりの段階に違いがあるからである。関わりの度合いで言えば、釜石市の関係人口の期間を経ての移住者の方が、よりその関係性は深いものであろう。しかし、その関わりの度合いによって、地域との関係性はいかに違うのかを明らかにすることで、段階による関係性が見えてくるのではないかと考えた。関わりの段階については 2-1 で記述する。

---

[8] 三陸ひとつなぎ自然学校とは、岩手県釜石市鵜住居町にある一般社団法人である。東日本大震災のボランティアコーディネートがきっかけで、2012 年 4 月に設立された（2013 年 5 月 28 日に一般社団法人化）。現在は主に放課後子ども教室など、子どもの居場所作りの活動を展開している（三陸ひとつなぎ自然学校 HP, http：//santsuna.com より 2019/12/05 閲覧）。

[9] 「活動人口」とは、「このまちに生きることを自ら選択し、小さな挑戦を産み育て、それぞれの役割を全うする、市民一人ひとり」のことである。自治会活動の担い手、地域の伝統芸能・お祭りの担い手、消防団などが活動人口に当てはまる（釜石市「釜石市オープンシティ戦略」より）。

[10] 釜石市総務企画部オープンシティ推進室長 石井重成「オープンシティ戦略の理念と取り組み」（http：//tohoku.mof.go.jp/content/000211918.pdf#search=%27 釜石+オープンシティ戦略%27）に「オープンシティ戦略」についての紹介がある。

2　関係人口とその背景

2-1　関係人口とは

関係人口は一般に「交流以上移住未満」というように、観光客と移住者の間に当てはまる人々のことを表す言葉であるが、なぜこの言葉が広まったのだろうか。本章では、関係人口の意味を整理するとともに、関係人口が注目されるに至った経緯や背景についてまとめていく。

それでは、ここで関係人口について、これまでの議論や定義をまとめていこう。そもそも関係人口が広まったのには、その言葉を世の中に発信した人物の存在が欠かせない。それは「東北食べる通信」の編集長である高橋博之と、月刊『ソトコト』の編集長である指出一正である。

高橋博之は、『都市と地方をかきまぜる』（光文社，2016）の中で、「観光は一過性で地域の底力にはつながらないし、定住はハードルが高い。私はその間を狙えと常々言っている。…（中略）… 交流人口と定住人口の間に眠る『関係人口』を掘り起こすのだ。…（中略）…私の周辺の都市住民たちは、移住は無理だけれど、こういうライフスタイルならできるという人間がとても多い。現実的な選択だ。関係性が生み出す力をいかに地域に引き込むか、である」と述べている。ここで高橋は、関係人口を観光と定住の間に存在する人々と定義し、移住を選択できない人が、地域と関わる現実的な選択としての、関係人口の可能性を論じている。また指出一正（2016）は、関係人口を「言葉のとおり『地域に関わってくれる人口』のこと。自分のお気に入りの地域に週末ごとに通ってくれたり、頻繁に通わなくても何らかの形でその地域を応援してくれるような人たち」と定義しており、その社会的な足跡や効果を「見える化」していることを特徴としてあげている。さらに「人口」という言葉で表現しているものの、数の論理ではなく「粒」の論理が重要であり、全体ではなく、個としての存在をしっかり見ていく必要性も論じている。さらにローカル・ジャーナリストの田中輝美は、『関係人口をつくる』（木楽舎, 2017）の中で、「地域を元気にすることは、住んでいる人にしかできないことなのでしょうか？…（中略）…たとえ住んでいなくても、地域を元気にしたいと思って実際に地域を応援し、関わる仲間が増えれば、地域は元気になる」と述べた上で、関係人口を「地域に多様に関わる人々＝仲間」と定義している。

このように関係人口とは、地域に様々な形で関わる人たちのことであり、人口という表現をしているものの、数ではなく、一人一人を表現する言葉である。また、移住は困難であるが、地域に興味があるという人たちへの新たな選択としての可能性も含む。

小田切徳美（2017）は、関係人口を図 1 のように図式化[11]し、①特産品の購入→②ふるさ

[11] 小田切徳美は日本農業新聞,「『農村関係人口』の可能性」2017 年 6 月 4 日付朝刊にて「関わりの階段」を示した。図 1 はその後、小田切によって示された「関係人口という未来：背景・意義・政策」『ガバナンス』202 号 pp.15 を元に作成した。

と納税などの寄付→③頻繁な訪問→④現地ボランティア活動→⑤二拠点居住→⑥移住・定住というように、関わりが段階的であることを「関わりの階段」で示した。そして農村への関心は「無関心－移住」という両極端なものではなく、濃淡があること、関わりの階段には上記に挙げたようなステップだけではなく、より多様であること、必ずしも移住・定住に向けて、この段階を上がることを目的としないことを合わせて述べている。

関係人口を考える上で重要なのは、「移住」を前提としないことだ。移住はできないと考える人たちが、新たな選択として、関係人口という関わり方を選択しているにもかかわらず、移住者確保のための施策となってしまっては本末転倒である。このように、今までの交流人口や定住人口を増やすことを目的としたものではなく、地域と「関わること」そのものに価値を置いたのが、関係人口であると言える。

ここまで、関係人口という言葉の持つ意味や定義についてまとめてきた。それでは、なぜこのように、関係人口が注目されるようになってきたのであろうか。次節でその背景について、田園回帰論の視点から整理していきたい。

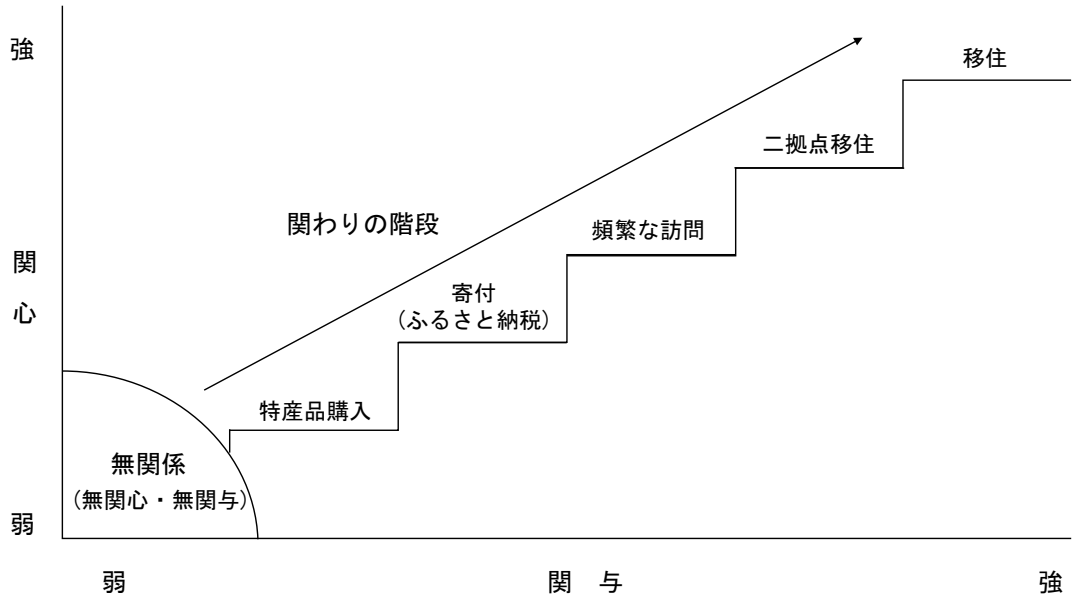

図１　関係人口の図式化と「関わりの階段」
（小田切徳美, 2018,「関係人口という未来：背景・意義・政策」『ガバナンス』202 号 pp.15 より筆者作成）

2-2　田園回帰の潮流

2-2-1　田園回帰とは

そもそも田園回帰とは、何なのだろうか。小田切徳美（2014）は、「田園回帰とは、必ずしも、農山村移住という行動だけを指す狭い概念ではない。むしろ、農山村（漁村を含む）に対して、国民が多様な関心を深めていくプロセスを指している」と説明している。さらに田園回帰は、都市の人々が実際に U ターンや I ターンで移住する「狭義の田園回帰」と、若者が農山村への新しい可能性を見出し、関心を持つ「広義の田園回帰」の 2 つの意味を持つ（小田切, 2015）。

以上のことから田園回帰とは、単なる近年の地方移住を示す言葉ではなく、様々な関心が農村に向けられ、都市と農村の共生へ向けた、広い意味を持つ言葉であることがわかる。そして、関係人口もその田園回帰の流れの中にあり、それは「広義の田園回帰」に当てはまる人々を表した言葉である（筒井, 2018）。

よって関係人口を捉えるためには、田園回帰論を整理していく必要があるだろう。「狭義の田園回帰」と「広義の田園回帰」から考えていきたい。

2-2-2　狭義の田園回帰

2-2-2-1　田園回帰以前の移住者

地方への移住と言っても、その移住志向は、時代によって変化している。1960 年代から 1970 年代においては、大学紛争に影響された学生たちによって、有機農業運動[12]が展開された。当時の学生について秋津元輝（2002）は、「どう生きるべきかを問い詰めた結果、そうした人々は地に根ざした生き方という思想にたどりつき、その必然として農業を選択した。思想的な参入であるから、参入した農村社会でも自らの思想を貫くことになる」と述べている。当時の学生の就農希望者の多くは、農村を自身の「思想を体現する場所」と捉えており、農村社会というコミュニティで生きることは、視野に入れていなかった。また、同年代において見られたのは、地方出身者の U ターンの動きである。高度経済成長による大都市への人口集中は、生活環境を悪化させ、生活費の高騰をもたらした。そして、産業の地方移転、経済重視から生活重視への価値観の転換によって、U ターン現象をもたらした（蘭, 1994）。さらに当時の U ターン者について蘭信三（1994）は、家庭の事情や都会での生活

[12] 有機農業運動は、都市の安全な食べ物を求める消費者と、農薬からいのちを守り、尊厳をもって農的自立をめざす農業者が、物質循環を回復しつつ、安全な食べ物を生産する運動のことである（桝潟俊子・松村和則編, 2002,『食・農・からだの社会学』新曜社, pp.199 より）。

へのあきらめや不適応など、消極的な理由が多い一方で、地元発展型というような積極的なUターンもあったと述べている。そして1980年代から1990年代前半にかけては、バブル経済を背景に、「田舎暮らし」がリゾート化した。農村の土地と住宅は、都市住民の投資の対象となり、それらを持つことがもっぱら当時のステイタスとなったが、その流れもバブルの崩壊によって停滞した（井口, 2012）。

2-2-2-2　田園回帰の始まり

今につながる「田園回帰」の動きは、1990年代後半以降に始まる[13]。1990年代後半は、定年帰農[14]などの、中高年世代の就農の動きがある一方で、1997年には「新・農業人フェア」が始まるなど、現役世代の就農の流れも生まれた（筒井他, 2014）。それは、農業Iターン者へのガイドセンターが設立され、就農初期の所得援助など、行政的な支援が充実してきたことが要因である（秋津, 2002）。2000年代前半には、団塊の世代が退職する「2007年問題」へ向けての動きが活発化し、特定非営利活動法人100万人のふるさと回帰・循環運動推進・支援センター（通称：NPO法人ふるさと回帰支援センター）が設立された。2000年代後半になると、NPO法人ふるさと回帰支援センターへの相談者は、団塊ジュニア世代以降の20代・30代、またはファミリー層の割合が増え、都市の生活から農村での暮らしを志向する「ライフスタイルの転換」や、農村での起業などを目指す者が目立ち始めた（図司, 2014）。その中には、農山村という未知の生活空間に関心を持つ学生や、自分探しのきっかけを求める者もいた（図司, 2013）。2005年『現代農業』の増刊8月号においては、「若者はなぜ農山村に向かうのか」が特集されており、Iターンの若者が農村社会で生き生きと生活する様子が捉えられている。またIターンだけではなく、Uターン者の転入要因も「家族・親戚の存在」や「就職口」だけではなく、「伝統文化」や「村民の交流・活動」が理由として挙げられ、近年、積極的なUターンも増えている（岡崎他, 2004）。

このように地方への移住者は、理想を掲げる学生・消極的な選択としてのUターン者→高所得者層→定年帰農・農業Iターン→ファミリー層・ライフスタイルの転換を求める者というように時代ごとに変遷している。

---

[13] 小田切徳美（2016）は、2015年の「平成26年度食料・農業・農村白書」、「国土形成計画（全国計画）」において政策文書のキーワードとして「田園回帰」が使用され、政府が田園回帰の動きを正式に認めた年、2015年を「田園回帰元年」としているが、その動き時代は1990年代後半から見られる。

[14] この言葉は農林漁業文化協会の月刊誌『現代農業』で発表された造語であり、1997年には「定年帰農」特集号が刊行された。

2-2-2-3　若者にとっての農村

2005 年『現代農業』増刊 8 月号「若者はなぜ農山村に向かうのか」においても取り上げられたように、近年、農村へ移住する若者の農村へ向けるまなざしは、田園回帰以前と大きく異なる。そして、移住の動機や移住後の地域での活動、地域との関係性も十人十色である（小田切・筒井編, 2016）。伊藤洋志（2017）は、個人レベルで始められ、やればやるほど頭と体が鍛えられ、技が身につく仕事を「ナリワイ」と表現し、一つの仕事で生計を立てる生き方ではなく、小さなナリワイをいくつも組み合わせる暮らしを紹介している。また、自給的農業と、自らの特性を生かした仕事を組み合わせる「半農半 X」という暮らしを選択する者もいる（塩見, 2014）。このように、自らの仕事を創りだす者がいるなど、現在の農村での暮らしは多様化している。

図司直也（2014）は、2010 年から 3 年間岡山県美作市で地域おこし協力隊をしていた男性にとって農村が、若くてやったことがないことでも、動いてみるチャンスがたくさんあり、「若者が生きていく力を身につけながら稼いでいける場所」になっていると報告し、「今日の若者の目には、農山漁村は、仕事がないから住めない場所ではなく、先人からバトンを受け継ぎ、自らが新たな価値を加えていくことで、新たな“業”を起こせる可能性に満ちた場所と映るようだ」と述べている。また伊藤洋志（2014）は、「心身ともに健やかな生活が送れ、競合他社とか機会損失とかそういう経済用語がさほど通用しない環境があるところ」を「フルサト」と表現し、フルサトは都会よりも田舎が良いと述べ、その理由を「人が少ないので、存在するだけで価値を生み出せる余地が多い。やるべき仕事がたくさんあって活躍の場が広い」からだとしている。また一方で、「地域の課題＝関わりしろ[15]」が見えていることも重要であり、見えているからこそ、その地域を選んで若者はやってくるため、受け入れる地域側も何が問題点であるのかを整理しておく必要がある（田中, 2017）。

このような、近年の若者の農村へのまなざしに関して松永桂子（2015）は、インターネットの普及により、都市と農村の関係がフラット化し、「経済成長を知らない世代がこれまでの規範にとらわれない生き方や働き方を志向し、地域課題の解決に寄与する仕事がキャリアのひとつとして選択されるようになってきた」と述べている。さらに、若者にとっての農村は、その地域の課題を解決する場としてだけではなく、個人のしたいことを地域課題の解決方向性と擦り合わせていき（松永・尾野, 2016）、自分だけ、地域だけの関係性ではなく、地域と自らが「ウィンウィン」の関係を目指すという関わりの場になっている（田中, 2017）。

このように農村とは、過疎化によって地域に余白がある分、若者にとってはその地域課題にチャレンジでき、活躍できる可能性を秘めている場所と映っているようだ。また、地域課題の解決と自分の関心をマッチングさせることで、農村は、より良いキャリア形成の場とな

[15] 関わりしろとは、自分から関われる余地がある場所、完璧に作られているのではなく、これからできる場所のことである（MACHI LOG ,「ソトコト編集長 指出一正氏 地域の活動を増やす「関係人口」とは？」, https://machi-log.net/?p=59424 より 2019/12/15 閲覧）。

りつつある。

2-2-2-4　田園回帰が始まった要因

それでは、なぜ、このように若者のポジティブなまなざしが、農村へ向けられるようになったのか。ここでは、作野広和（2016）の田園回帰の発生要因について要約していく。作野は、大都市圏側のプッシュ要因と地方圏側のプル要因という構造的な要因があったことが、田園回帰を発生させたと述べている。大都市圏のプッシュ要因には、長距離通勤や、待機児童の問題、都市生活における人と人との結びつきの弱さから、個人の生き方に疑問を持つ者が増えたことが挙げられている。地方圏側のプル要因としては、地域問題解決のための「地域づくり」や「まちおこし」などの活動が展開され、UI ターン者の取り組みも数多く「成功例」としてメディアなどで紹介されたことがある。これらの成功例を知った、大都市の住民の中には、自己実現の可能性は農村にあるのではないかと、その移住を模索する者が現れた。作野は、このようなプッシュ要因とプル要因によって、比較的住む場所を移動しやすい、単身の若者を中心に、田園回帰現象が見られるようになったと分析している。また作野は、政府の政策[16]、東日本大震災による大都市圏移住の不安感、増田レポートによる地方消滅の危機感が国民に広がったことも田園回帰の直接的な要因になったと述べている。

都会と農村の持つ構造的な要因、政府の積極的な移住定住政策によって移住が以前よりしやすくなったというような行政サポートの充実、自然災害による都市生活への不安や地方消滅への国民の危機意識、農村生活への期待感といった心理的な要因が働いたことで、田園回帰が始まったと言える。

2-2-3　広義の田園回帰

2-2-3-1　都市農村交流とは

これまで、人口移動としての狭義の田園回帰についてまとめてきたが、ここからは、広義の田園回帰としての都市農村交流[17]のとりくみについて述べていく。広義の田園回帰は、地域への関心も含む広い概念である。ここで都市農村交流を広義の田園回帰として取り上げるのは、都市農村交流の取り組みが、関係人口創出事業と重なる部分が多いからである。

---

[16] 2008 年からは農林水産省による「田舎で働き隊」、2009 年からは総務省による「地域おこし協力隊」の制度が始まった。

[17] 森戸哲（2001）は、都市農村交流の形態を①姉妹都市提携による交流、②サミット交流、③農産物を媒介とする交流、④特別村民制度、⑤オーナー制度、⑥イベント交流、⑦農業体験交流、⑧保養施設による交流、⑨都市内拠点施設、⑩市民農園交流、⑪山村留学、⑫リサイクル交流を例に挙げている。

都市農村交流について、筒井一伸（2013）は「農山村への都市住民の流動を発生させて、それを農山村の地域づくりに生かそうという“ヒト”に着目した取り組みである。高度経済成長期以降の農山村における過疎化はヒト不足をもたらし、…（中略）…このヒト不足を解消することが農山村施策の 1 つとして位置づけられ、都市－農山村交流はその一翼を担ってきた歴史がある」と論じている。

このように、都市住民を農山村の地域づくりに生かそうとする取り組みは、現在の総務省が行っている「関係人口創出事業」と同様であり、都市農村交流の形態も多くはそれと重なる部分が大きく、地域活性化の手法の一つとして、政策内に位置付けられてきた。ここでは、都市農村交流がどのような流れの中で始まり、どのような変遷を遂げてきたのかについてまとめていく。

2-2-3-2　都市農村交流の変遷

都市農村交流の始まりは、1970 年代に遡る。1970 年代には、大分県湯布院町の都市住民に牛一頭のオーナーになってもらうことで牧場を守る構想や、福島県三島村の交流人口確保のための「特別町民制度」など「異端児的な地域運動」とも呼ばれる、地域の活動が展開した。それまでの農村地域の地域振興政策は、農村の工業化による製造業と建設業の育成であったため、農村工業化の手法（正統派としての開発手法）に対して上記の地域運動は、「もうひとつの開発手法」として注目され、さらには「隙間を埋める開発手法 」として国の施策に位置づけられ、推進されていった。

1984 年からは農林水産省が、都市と農村の交流促進事業を始め、国土庁地域振興情報ライブラリーや自治省地域活性化センター、農林水産省ふるさと情報センターなどが設立されるなど、それまで草の根的な活動であった都市農村交流は、公共性を持った事業として確立していった（小川, 1996）。また 1987 年の「第 4 次全国総合開発計画」では、「定住と交流」、「交流ネットワーク」が重要な概念として提示され、国家レベルの重要な施策として確立された（筒井, 2013）。その後は、農村地域のリゾート開発を進める「リゾート法」（総合保養地域整備法）が制定され、1988 年から 1989 年のバブル経済期にかけては、各市区町村に地域振興のための特別交付金として 1 億円を交付した「ふるさと創生事業」（自ら考え自ら行う地域づくり事業）、1990 年には「市民農園整備促進法」が制定され、同年には「農業・農村活性化農業構造改善事業」、「21 世紀むらづくり塾運動」も始まった。また 1992 年には農林水産省の研究会によって「グリーン・ツーリズム 研究会中間報告書」が提出され、1994 年には、グリーン・ツーリズムを推進する「農山漁村余暇法」（農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律）が制定された。さらに同年に「緑のふるさと協力隊」の制度が、1996 年には国土庁によって「若者の地方体験交流支援事業」（地域づくりインターン事業）が開始された。1998 年には、国土計画「21 世紀の国土のグランドデザイン」

において「多自然居住地域」が提唱された。多自然居住地域とは、農山漁村等の豊かな自然環境に恵まれた地域を、21 世紀の新たな国土のフロンティアとして位置付け、地域内外の連携を進め、都市的なサービスと、ゆとりある居住環境、豊かな自然を合わせて享受できる自律的な圏域のことである（筒井, 2018）。そして、政府の目指した「多自然居住地域の創造」とは、「中小都市と農山村が、お互いの土地や資源や場がうまく活用されるようなしくみと関係を築き、そこに人口に見合ったレベルの高い経済と安心できる生活のシステムをつくり出していくこと」であった（宮口, 2007）。このように行政の積極的な施策と、農村と都市の相互の要求によって、都市農村交流は急速に普及・定着した（森戸, 2001）。

2000 年には食料・農業・農村基本計画の中で、グリーン・ツーリズムが推進され、2003 年には農家民宿に関しての規制が緩和されたことで、都市農村交流の中心は農家民泊とする動きが強くなっていった（齋藤, 2014）。また行政の取り組みとしては、2002 年に農林水産省において「都市と農山漁村の共生・対流に関するプロジェクトチーム」が発足し、2008 年からは「子ども農山漁村交流プロジェクト」、「田舎で働き隊！事業」、2009 年からは総務省の「地域おこし協力隊」の制度が開始された。現在、都市農村交流は「交流の段階」から、地域によって差はあるものの、都市住民と農村住民の良好な主体的関係をつくりだす「協働の段階」へと向かっている（図司, 2014）。

このように都市と農村の交流事業は、地域の活動に端を発し、農村の価値が再認識されたことで国の施策として位置付けられた。また、グリーン・ツーリズムや農家民泊といった農村空間を余暇活動で楽しむ取り組みが始まるとともに、多自然居住という都市と農村の共生も推進されたことで、都市農村交流は活発化していった。そして、現在は「地域おこし協力隊」の制度のように、交流事業はさらなる展開を見せている。それでは、なぜこれほどまでに都市農村交流は発展したのであろうか。その理由について整理していきたい。

2-2-3-3　都市農村交流の発生・拡大要因

立川雅司（2005）は、農村への理解の変化を「ポスト生産主義」への移行と表現している。これまで農村は、「安価で大量の農作物を提供してくれるため」の場所であったが、それだけではなく、農産物に対しての安全性や品質を重要視し、さらには「癒しや余暇活動、交流体験」を求めるように需要が変化している。このことが「ポスト生産主義」である。また、日本社会と都市農村交流について川手督也（2011）は、「日本の総都市化が進み、『故郷喪失』により農村が再評価され、農業・農村体験の機会が貴重なもの、豊かな自然環境や生活文化がかけがえのないものになるに従い都市農村交流の取り組みが各地ではじまり、むらづくりの中心となっていった」と述べている。

一方、地域側の理由としては、高度経済成長によって農村集落において「混住化」、「高齢化」、「地域経済の縮小」が問題視され、集落機能が著しく低下していたこと（齋藤, 2014）、

都市との積極的な交流で、農産物の販路を開拓・拡大させること、交流イベントにより交流人口の増大させることや、都市自治体の資金による交流施設建設を期待していたことが理由としてあげられる（森戸, 2001）。

このように農産物の生産から農の多面的機能に都市の需要が変化したこと、そして農村工業化を地域振興策として進めてきたものの、農村の機能が積極的に評価されたこと、また人口減少による集落機能の低下という農村の実態と、それを補うための都市農村交流という位置づけによって、都市農村交流は活発化したのである。

2-2-4　田園回帰と関係人口

ここまで、狭義の田園回帰と広義の田園回帰について整理してきた。現在の田園回帰の新たな層として、ライフスタイルの転換を望み、その実現のために農村移住を志す者がいる。そして、彼らにとっての農村とは地域との関わりの中で、やりがいを感じつつ活躍できるキャリア形成の場となっている。また、農村空間の価値が再認識されたことで、都市と農村の交流は活発化し、さらには交流だけではなく協働の段階へと変化している。

このように現在、農村とはポジティブな可能性を持つ場所として認識され、農村の価値自体が再評価されている。そして、交流活動の価値の認識によって都市農村交流の幅も協働段階に至るなど広がりをみせつつある。

本節からは、田園回帰の背景や要因によって関係人口は生まれたこと、そしてこれまでの田園回帰において、農村と関わりを持つ層への名称が、「関係人口」であることが確認できた。そして「関係人口創出」とは、都市農村交流における「協働」の枠をより広げることを目的としているのである。よって、これまでの交流に加えて、都市住民の力を農村に生かすために、より「協働」に重きを置いたのが関係人口であると言える。

2-3　よそ者の必要性

これまで、田園回帰について整理することで、関係人口の背景や田園回帰論における位置付けについてまとめてきた。本節では、関係人口の必要性を人材補填としてではなく、その「よそ者」が持つ特性から論じていきたい。

近年、「よそ者[18]・ばか者・若者」が地域づくりのキーパーソンとして通説のように言われている。そして、中村尚司（2003）は「対等なパートナー」としてのよそ者の参加が必要で

[18] 赤坂憲雄（1985）は、よそ者を空間移動の観点から、①一時的に交渉を持つ「漂流民」、②程住民でありつつ一時的に他集団を訪れる「来訪者」③永続的な定着を志向する「移住者」④秩序の周縁部に位置付けられた「マージナル・マン」⑤外なる世界からの「帰郷者」⑥境外の民としての「バルバロス」の 6 つに分類している。

あり、よそ者であるがゆえに、地域において果たす役割があると述べている。このように「よそ者」は地域づくりにおいて注目されている。それでは、よそ者ゆえに地域において果たす役割とは何であろうか。

鬼頭秀一（1998）は環境運動における「よそ者」の役割に関して、「『よそ者』は地域に埋没した生活では得られにくいより広い普遍的な視野を環境運動に提供し、ごく当たり前だから気づかされない自分たちの自然とのかかわりを再認識するなど新たな視点を外から導入する役割がある」と述べている。また、小田切徳美（2013）は、都市農村交流について「交流活動は、意識的に仕組めば、地元の人々が地域の価値を、都市住民の目を通じて見つめ直す効果を持っている」と述べている。このようによそ者は、地域住民が当たり前に感じている資源を地元住民と異なる視点から発見し、地域の持つ価値に気づかせる効果を持つ。よそ者がもたらす効果は地域の資源の再発見だけではない。敷田麻実（2009）は地域づくりにおいて、よそ者がもたらす効果を①技術や知識の地域への移入、②地域の持つ独創性の惹起や励起、③地域の持つ知識の表出支援、④地域（や組織）の変容の促進、⑤しがらみのない立場からの問題解決の 5 つに整理している。また、現在の地域やコミュニティがよそ者を必要とする理由を、①交流人口の増加、物流・交通・インターネットの浸透によって地域外との交流を排除できない地域が置かれた現在の状況と、②地域の限られた人材だけでの解決手段が必ずしも「最適解」とは言えないことを挙げている（敷田, 2005）。

よそ者は、地域に新しい情報や見方をもたらし、その地域に変化を与える存在として地域づくりに欠かせない存在となっている。そして、よそ者が持つ要素として一番大きいのは、その地域の「しがらみ」と関係ない立場という外部性を保っていることだろう。

よそ者の持つ特性に加えて、その外部性を保ち続けながら地域と関わることができるという点において、関係人口が地域で果たせる役割がある。

2-4　移住における課題

田園回帰の潮流とよそ者の必要性という観点から、関係人口が注目に至った経緯について述べてきたが、関係人口が注目される背景には、このようなポジティブな理由だけではなく、現実的な問題もある。それは、農村に憧れを持つ者が増えている一方で、移住に踏み切れない者が多いといった実態である。図 2 は総務省が行った都市住民の農村移住に関するアンケート結果である。全体として、若い層の方が農村地域に興味を持っていることがわかる。また、20 代、30 代男性において「いずれは農村漁村地域に移住したいと思う」、「条件が合えば農山漁村地域に移住してみても良いと思う」が合計で 40%を超えるのに対して、実際に移住の予定がある人は、20 男性で 1.0%、30 代男性で 1.6%である。女性においても同様に、移住予定に関しては極めてその割合が小さい。

このように、移住への憧れは抱きつつも、実際に移住まで踏み切る人は少ないのである。

この移住志向と現実の乖離があるのは、移住には「仕事」「住宅」「コミュニティ」の 3 つのハードルが存在しているからである（小田切, 2014）。西村俊昭（2010）は、空き家利用の活用が進んでいない実態や、移住者が集落に溶け込む難しさ、学校や病院施設の減少などから、若い層の移住にも限界があると論じている。また、移住政策は少数であるうちはよいものの、現在どの自治体もその政策に乗り出していることから、近年の移住政策は「自治体間人口獲得ゲーム」と化しているとの指摘もある（山下, 2014）。

このように、農村移住の希望と現実的な移住には大きなギャップがあり、そして移住者政策にも限界がある。よってこのような現実が、関係人口という概念が自治体に広まった要因の一つである。

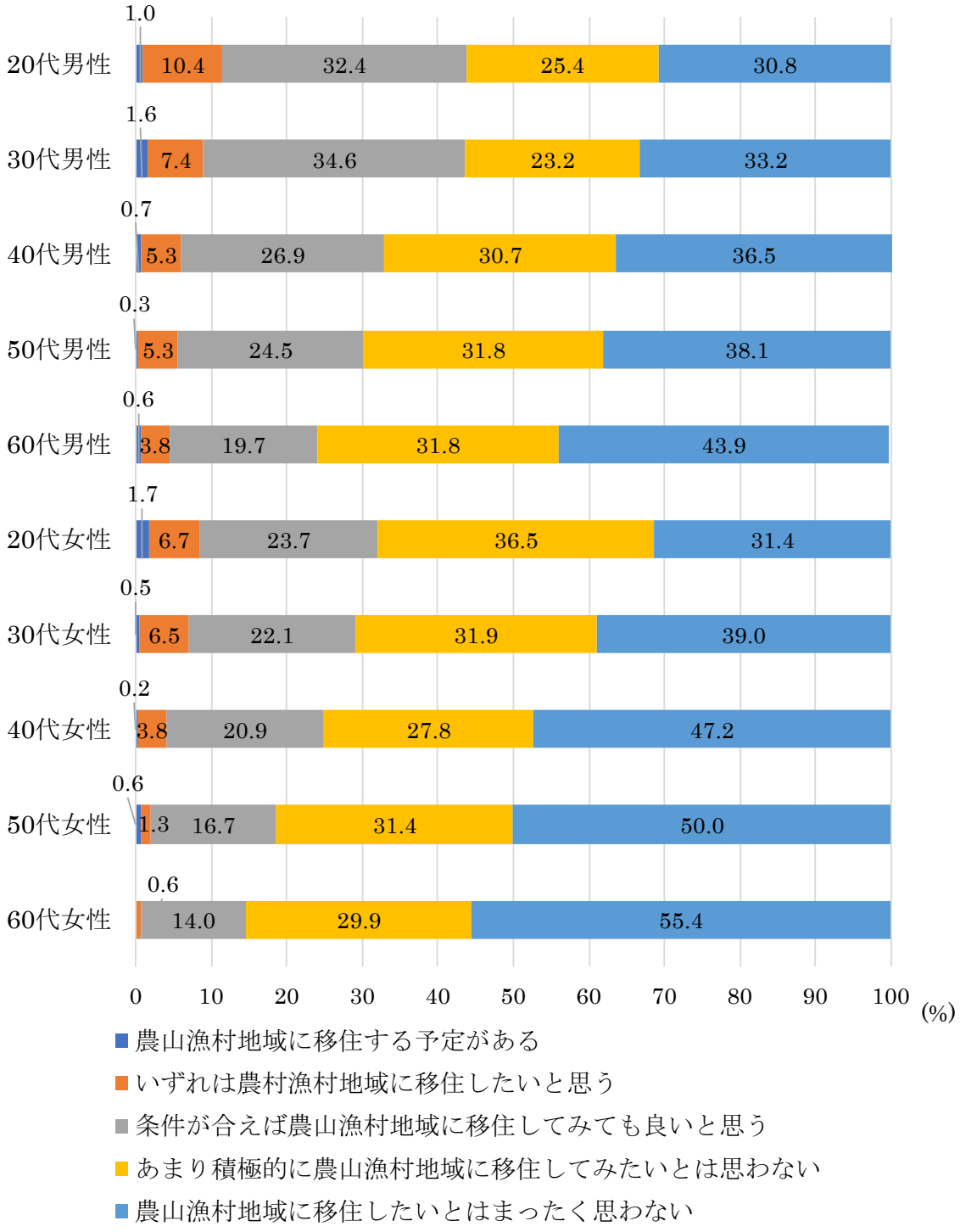

図２　都市住民の志向

（総務省,「都市部の住民の意識調査」,

「『田園回帰』に関する調査研究中間報告書」, 2017 に基づいて作成）

2-5　まとめ

2 章では、関係人口についてとその背景についてまとめてきた。

関係人口とは、田園回帰の潮流の中で生まれた言葉であり、その言葉の誕生は、決してここ数年の取り組みによるものではない。1990 年代以降の就農目的の移住から、2000 年代にはファミリー層やライフスタイルの転換を希望する若い単身層に至るなど、時代ごとに田園回帰の中心となる層は異なる。そして、移住を希望する者の多くは農村における自己実現や自分らしい生活への期待感を抱いている。このように近年の若者が向ける農村へのまなざしには、ポジティブな面が多く見受けられる。

また移住の流れとともに、都市と農村の交流の重要性は、1970 年からの地方自治体の取り組みによって認識され、国の政策として推進されてきた。都市農村交流の取り組みは、関係人口創出と大きく重なる部分がある。それは筒井一伸（2013）が都市農村交流について、「農山村への都市住民の流動を発生させて、それを農山村の地域づくりに生かそうという“ヒト”に着目した取り組みである」と述べていることから明らかである。

さらに「よそ者・ばか者・若者」の言葉にも含まれるように、「よそ者」という存在の地域づくりにおける重要性が認識されつつある。地域とはしがらみのない立場からの視点や、地元の人が気付かない地域資源の発見など、外部者の地域へのまなざしはこれからますます重要になってくるだろう。一方、田園回帰の潮流の中で、移住希望と現実には大きなギャップがある。移住に伴うハードルの高さから、地域へ関心を持ちつつも、実行まではいかない割合が 20 代、30 代にかけて特に高くなっている。このような、地域への期待感が高まりつつある中で、地域に関わるハードルを下げて、移住まで踏み切れないという層を地域づくりに生かそうという取り組みが、関係人口づくりなのである。

多くの若者が農村へ期待のまなざしを向け、そして農村側もよそ者という外部者への期待のまなざしを向けている。その一方で、農村への移住希望を持ちつつも、現実的には移住はできないと判断する者も多い。このような要因が重なったことで、関係人口という概念が注目され始めたのである。

3 章・4 章では実際の事例をもとに関係人口について論じていく。本研究の対象者は、近年の関係人口創出を目的とした事業への参加者ではない。それぞれ都市農村交流など広義の田園回帰の中に位置づけられる活動に参加している、もしくは参加していた人たちである。2 つの事例について、個人と地域の「関係」に焦点を当て、何が関係のきっかけとなっているのか、継続的な関係性につながるのかについて探っていきたい。

3　北海道厚沢部町の事例

3-1　厚沢部町の概要

厚沢部町は、北海道南部の渡島半島、檜山管内に位置する農林業を基幹産業とする町である。札幌市からは車で約 4 時間半（235km）、函館市からは約 1 時間（59km）。北は森町・八雲町、南は上ノ国町・木古内町、東は乙部町・江差町、西は北斗市に隣接する内陸の町である。町名の厚沢部は難読地名として有名であり、アイヌ語の「アッ・サム（楡皮・干す処）」や「ハチャム・ベツ（桜鳥・川）」が由来だと言われている。総面積は 460.58 ㎢で、そのうち 83%が森林であり、安野呂（あんのろ）川・鵜（うずら）川・厚沢部川本流の 3 本の川が流れる自然豊かな町である。人口は 2000 年に 5,285 人、2010 年に 4,614 人、2015 年には 4,049 人と減少傾向にあり、2019 年 10 月末の時点では 3,814 人である。また、2016 年時点での高齢化率は 39%を超える。

厚沢部町は、ジャガイモの品種の一つである「メークイーン」発祥の地として知られる。その所以は、1925 年に厚沢部町にあった桧山農事試作場において、日本で最初にメークイーンの試作が始まったことが関係している。檜山南部地域最大の農業地域である厚沢部町であるが、2015 年農林業センサスによると、農業従業人口は 504 人、うち 65 歳以上が 265 人というように農業従事者も半分は高齢者が占めており、離農者の増加や後継者不足が問題となっている。また、作付面積は水稲、大豆、馬鈴薯、小麦が多く、その他にも大根、スイートコーン、カボチャ、アスパラガス、ブロッコリーなどの野菜も生産している。

図 3　厚沢部町の位置（筆者作成）

3-2　厚沢部で関係人口を生む「農楽会」

3-2-1　農楽会の概要

本項は 2019 年 6 月 15 日・16 日に、農楽会事務局荒木敬仁さんへ行った聞き取り調査の内容をもとに記述する。

農楽会は 2015 年に設立された、農繁期（7 月下旬から 9 月末まで）に農業アルバイト生を受け入れる任意団体である。なお、アルバイト生の受け入れ自体は、2014 年から始まっている。2019 年度に農楽会に所属する農家戸数は 15 戸、事務局は 2 名、計 17 名で農楽会は構成されている。受け入れ期間中に、各農家でアルバイト生を数名受け入れる。

農楽会の特徴は、農業アルバイトの募集だけではなく、厚沢部滞在期間中に、車の運転免許と狩猟免許取得の講習が受けられるところにある。厚沢部町の自動車学校と農業アルバイトを掛け合わせ、自動車学校の受講料をアルバイト代でまかなう「0 円免許合宿」という参加方法がある。狩猟免許はその取得方法自体がわかりにくいのだが、農楽会の狩猟免許合宿は、狩猟免許の取り方から学べる。また、付近には東京理科大学長万部キャンパスがあるため、長期休暇の寮が閉鎖される時期には、在籍する学生も毎年 10 名から 20 名ほど参加している。

表 1 は農楽会の参加者データをもとに作成した。初年度を除き、30 人程度の受け入れが続き、2019 年度は 46 人の参加というように今までで一番多い。表 1 の農業アルバイトの（）内の人数は、東京理科大生（以下理科大生）以外の農業アルバイトのみの参加者数であるが、2019 年度は理科大生以外の農業アルバイトのみの参加者が多くなっている。

表 1　参加者数とその内訳、及び受け入れ農家数

年度	参加者総数（人）	農業アルバイト（人）	0 円免許（人）	狩猟免許（人）	受入れ農家（戸）
2014	11	11			5
2015	25	20	5		8
2016	37	15（3）	9	13	14
2017	24	14（2）	4	6	14
2018	30	14（2）	7	15	14
2019	46	26（9）	7	14	15

（出所）農楽会 2014 年度から 2019 年度の参加者データより作成

3-2-2　農楽会の設立と変遷

本項の内容も前項と同様に、2019 年 6 月 15 日・16 日に農楽会事務局荒木敬仁さんへの聞き取り調査の内容をもとに記述していく。

農楽会設立者の荒木敬仁さんは埼玉県出身で、現在は厚沢部町役場に勤務している。荒木さんは大学在籍中の 2013 年 8 月に厚沢部町地域おこし協力隊となり、農業活性化担当として、厚沢部町当路地区で農業研修をしていた。農家さんと話す中で、農業の労働力不足を強く感じ、その解決策を模索している中、東京理科大学出身の友人から「長万部校舎にいた時、長期休暇中に道内でアルバイトをしたかった」という話をきっかけに、2014 年度に理科大生 11 名を農業アルバイトとして、受け入れを始めた。

そして 2015 年 5 月に農楽会を発足した。発足時の受け入れ農家戸数は、農業研修を行っていた当路地区を中心に 5 戸だった。2015 年度からは「0 円免許合宿」を開始した。2014 年度に参加した理科大生に荒木さんが、来年度の夏休みの予定を聞いた際に、免許を取りに行くという話や、実際に免許合宿に参加した大学生に空き時間が暇であるという話を聞いたことが、0 円免許合宿を始めるきっかけとなった。農業研修の中で獣害被害の深刻さを感じた荒木氏は、狩猟の免許取得しており、その話を聞いたアルバイト生が興味を持ったことから、2016 年から狩猟免許合宿がスタートした。そして現在は、理科大生、0 円免許合宿生、狩猟免許合宿生、加えて農業アルバイトのみの参加者を受け入れている。

なお、本章において、自動車などの免許取得を目的に参加したアルバイト生は 0 円免許生、狩猟免許取得を目的として参加したアルバイト生を狩猟免許生と記述する。また、参加者全員について記述する際はアルバイト生と記述し、農作業のみのアルバイト生の場合は、農業アルバイト（農業アルバイトのみ）とする。

表 2　農楽会の変遷

年度	農楽会の変遷
2014	東京理科大学長万部校の学生 11 名を受け入れ
2015	任意団体「農楽会」を結成 0 円免許合宿を始める
2016	狩猟免許合宿を始める

（出所）2019 年 6 月 15 日・16 日、荒木敬仁さんへの聞き取りより作成

3-2-3　農業アルバイト生の１日

それでは、実際にアルバイト生は厚沢部町滞在期間中、どのような生活を送っているのだろうか。筆者は、2019 年 8 月 24 日から 9 月 1 日までアルバイト生と同様の共同生活を行った。その期間中の参与観察記録をもとに記述していく。

アルバイト生は厚沢部町内の宿舎で共同生活を行う。2019 年度は教員住宅 2 棟と 2019 年 3 月末まで使用されていた保育園を宿舎としている。教員住宅は男女 1 棟ずつ。保育所は男女混合である。

アルバイト生の 1 日の流れは以下の通りである。朝、各農家さんが宿舎まで迎えに来るので、それまでに身支度をする。宿舎から家が近い農家さんの場合は、宿舎にある自転車で農家さんの家まで行く。就業時間のスタートは 7 時から 8 時の間であり、朝ごはんは就業時間前に各自で食べる。宿舎にはキッチンがあるので、そこで調理する者もいれば、昨日の残りを食べていく者もいる。食材の多くは農家さんからの頂き物である。宿舎には、トマト、ピーマン、ナス、ジャガイモ、カボチャ、ブロッコリー、ズッキーニなどの野菜や、スイカやメロンなどの果物が溢れているため、食材には困らない。足りない調味料や食材に関しては、誰かが農家さんにスーパーに連れて行ってもらう際に、買ってきてもらう。

農作業内容は時期や農家さんによって異なり、ジャガイモやカボチャ、スイートコーンの収穫など様々である。休憩は各農家によって異なるが、おおよそ午前と午後に 1 回ずつと昼休みがある。また、昼ごはんは 2 つ形態がある。1 つは、農家さんの家で食べるパターンで、昼ごはんをいただく場合は 1 日の労働賃金から、500 円引かれる。もう一つは宿舎で食べる、もしくは宿舎で弁当を作り持っていくパターンである。

農作業終了時刻は 17 時から 17 時 30 分で、農作業を終えたアルバイト生は宿舎に戻ってくる。作業を終えたアルバイト生は洗濯をする者、休む者、温泉に行く者など様々である。また、各農家さんの家で夕食をご馳走になったり、8 月中旬から 9 月中旬にかけては地区ごとに祭りがあるので、参加者はお祭りで神輿を担いだり、地域の方とご飯を食べたりなど、厚沢部の地域の方と交流する機会もある。教員住宅にはシャワーが併設されているが、保育所にはないため、保育所のアルバイト生は自転車に乗り、近くの温泉に行く。荒木さんが厚沢部町に掛け合って温泉の代金は一回 100 円である。夜ご飯の準備は、作りたい人が作るというように当番制ではない。そして、夜ご飯を保育所メンバーは保育所で、教員住宅のメンバーは男子寮、女子寮のどちらかに集まり、みんなで食べる。

食後は、参加者同士で話したり、お酒を飲んだり、手作りのボードゲームで遊んだり、部屋でゆっくり過ごすなど様々である。保育所から教員住宅に、教員住宅から保育所に来て交流するなどもしている。また、それぞれの居住地に帰る時期がバラバラなので、送別会などが度々行われる。就寝時間はおおよそ 22 時であり、多くが次の日の作業に向けて眠りにつく。

さらに、ここでの生活に明確なルールはない。共同生活はアルバイト生が作り上げている。

「滞在注意事項」が滞在初日に配布されるが、その内容をそのまま引用する。

①笑顔であいさつ、コミュニケーション
②作業中過度に携帯をいじるのは止めよう
③わからない事は必ず聞こう
④休みをもらいたいときは最低 3 日前から
⑤食え！って言われたらなるべく食おう
⑥地域の人とも交流しよう
⑦22 時以降は静かに（消灯）

このように、共同生活に関する注意事項は就寝についてだけである。決まったルールや規律は特に存在せず、参加者同士でこの生活を作り上げていくのである。

また、0 円免許生や狩猟免許生はその講習がある際は、午前中はアルバイトをして、午後は教習、または 1 日作業を休むなど、それぞれが農家さんと相談してスケジュール管理をしている。

図 4　食事風景　（2019 年 8 月 29 日筆者撮影）

3-2-4　参加のきっかけとその理由

アルバイト生は、学生を中心に 20 代から 40 代までと幅広く、九州や本州からの参加も多い。なぜこんなにも厚沢部町に人が集まるのか。そのきっかけと理由を、2018 年度農楽会実施のアンケート結果[19]と聞き取り対象者 9 名の回答から明らかにしていきたい。なお、表 3 での参加形態について、農業アルバイトのみの参加者は農業アルバイトと表記している。また、年齢は聞き取り時点での年齢である。

0 円免許生の C さんは、夏休みにバイクの免許を取ろうと思い、インターネット検索で農楽会を見つけて参加した。面白い経験ができて、かつ農業をやってみたい気持ちもあったと語る[20]。図 5 から図 7 からも、参加者が農楽会を知るきっかけの多くは、インターネットの検索や、友人などからの口コミであることがわかる。このように参加者は、インターネットで「0 円」「免許」「狩猟」などの興味のあるワードを検索することによって、農楽会にたどり着いているようである。

また、農業アルバイト生のきっかけにおいてその他が 88.9%を占めているのは、荒木さんが東京理科大学長万部キャンパスで毎年、農楽会のアルバイトについてのプレゼンテーションを行っており、そこでの説明を聞いて、理科大生の多くは農楽会を知ったからだと考えられる。理科大生である B さんは、夏休みのアルバイトを探しており、荒木さんのプレゼンを聞いたことが参加のきっかけになったと語っていた[21]。

A さんと F さんは鹿児島県沖永良部島での農業アルバイトで、過去の農楽会のアルバイト生から、農楽会の話を聞いたことが参加のきっかけとなった。参加者の中には、農業を中心とした季節労働を行う者も多く、冬期間の沖永良部島におけるジャガイモ収穫の農業アルバイトも参加のきっかけとなっている[22]。

図 8 から図 10 から、参加理由は「楽しそうだったから」「農作業を経験してみたかったから」が農業アルバイト生、0 円免許生、狩猟免許生で共通して高い。

また、0 円免許生では「安く免許が取得できる」の回答が一番高く、狩猟免許合宿生の回答では「狩猟の現場を見てみたかった」の回答が一番多かった。

参加理由について、昨年度も参加した H さんは次のように語っている。なお、() 内は筆者による挿入である。

> 夏休みが長いから、他の地域に滞在して生活したいなって思って。実家暮らしだから、一人暮らしの気持ちもわからないし（知りたいと思った）。家事とかは全然できるから、共同生活も苦じゃないし。こういうことできる場ってないし、いいかなって思って。ネッ

---

[19] 回答数は農業アルバイト生（回答数 9 人／参加者数 14 人）、0 円免許合宿生（回答数 6 人／参加者数 7 人）、狩猟免許合宿生（回答数 14 人／参加者数 15 人）である。
[20] 2019 年 8 月 26 日、C さんへの聞き取りより。
[21] 2019 年 8 月 25 日、B さんへの聞き取りより。
[22] 2019 年 8 月 25 日、A さんと F さんへの聞き取りより。

トで検索したり、北海道に友達もいたから。そういうのないかなって調べてて、ここが見つかって[23]。

H さんは農作業ではなく、この共同生活ができるという環境に惹かれたという。また、以前に農楽会の農業アルバイトを経験した友人から話を聞いて参加し、大学院で栄養学について学ぶ D さんは、

栄養は口に入る部分でしか関わらないけれど、一次産業の部分ってすごく大事だなって思ってたから。農業もやりたかったし、狩猟もやりたかった[24]。

と、農業と狩猟の両方をできることに興味を持ち、参加を決めた。このように農業だけではなく、その他の要素と組み合わせることで多くの人が厚沢部に集まっているようである。そのことについて、農楽会事務局の荒木敬仁さんは次のように語っている。

ここ、遠いんですよ。わざわざ交通費かけてまで来なくていいかなっていうのがあって。じゃあどうやったら来てくれるかなって考えた時に、それだったら来てみたいかなって、切り口をいろいろ用意してるって感じかな。入り口をいろいろ。…（中略）…ただ募集してもこないですよ。それでどこも苦労してるんだから。だから、50 人も来るって言ったらびっくりされますね[25]。

農業アルバイトの募集は多いが、農楽会のように他の要素と組み合わせて行うようなケースは中々ない。一律 1 万円で交通費補助は出るものの、遠くからの参加であれば、それ以上に交通費はかかる。2019 年度も関東や関西、九州からの参加が多数あった[26]。地域への入り口を単一に絞らずに、様々な要素と組み合わせる募集が多くの人を惹きつけている。

このように参加者のきっかけや参加動機から、「0 円免許合宿」や「狩猟免許」と、農業アルバイトを組み合わせていること、また共同生活という日常とは異なる体験ができることなど、個人の興味と農楽会で「できること」が結びついたことで、参加に至っていることがわかる。

---

[23] 2019 年 8 月 30 日、H さんへの聞き取りより。
[24] 2019 年 8 月 28 日、D さんへの聞き取りより。
[25] 2019 年 8 月 29 日、荒木敬仁さんへの聞き取りより。
[26] 2019 年度は北海道からの参加が 6 名、東北 4 名、関東 21 名、北陸 1 名、関西 6 名、中国四国 2 名、九州 5 名と様々である。東京理科大生は北海道長万部町に住んでいるが、住民票は実家の住所のままであるように、実際の居住地と異なる人もいる（2019 年度厚沢部農楽会参加者データより）。

表 3　聞き取り対象者一覧

対象者	年齢	性別	属性	参加形態	参加期間	備考	聞き取り日
A	20 代	男	社会人	狩猟	2019/7/20～9/10	初参加	2019/8/25
B	10 代	男	大学生	農業 アルバイト	2019/8/9～9/21	初参加	2019/8/25
C	20 代	男	大学生	0 円免許	2019/8/12～9/10	初参加	2019/8/26
D	20 代	女	大学院生	狩猟	2019/8/16～8/30	初参加	2019/8/28
E	30 代	男	社会人	農業 アルバイト	2019/7/20～9/30	2016 年度 0 円免許合宿 2017 年度狩猟免許に参加	2019/8/27
F	40 代	女	社会人	狩猟	2019/7/20～9/17	2018 度 0 円免許合宿に参加	2019/8/25
G	20 代	男	社会人	農業 アルバイト	2019/7/28～8/12, 8/20～9/20	2018 度 0 円免許合宿に参加	2019/8/27
H	10 代	男	大学生	農業 アルバイト	2019/8/10～9/16	2018 年度農業アルバイトで参加	2019/8/30
I	20 代	男	社会人	農業 アルバイト	2019/8/17～9/30	2018 年度バイク免許、狩猟免許で参加	2019/8/26

（出所）聞き取り及び 2019 年度農楽会参加者データを元に作成

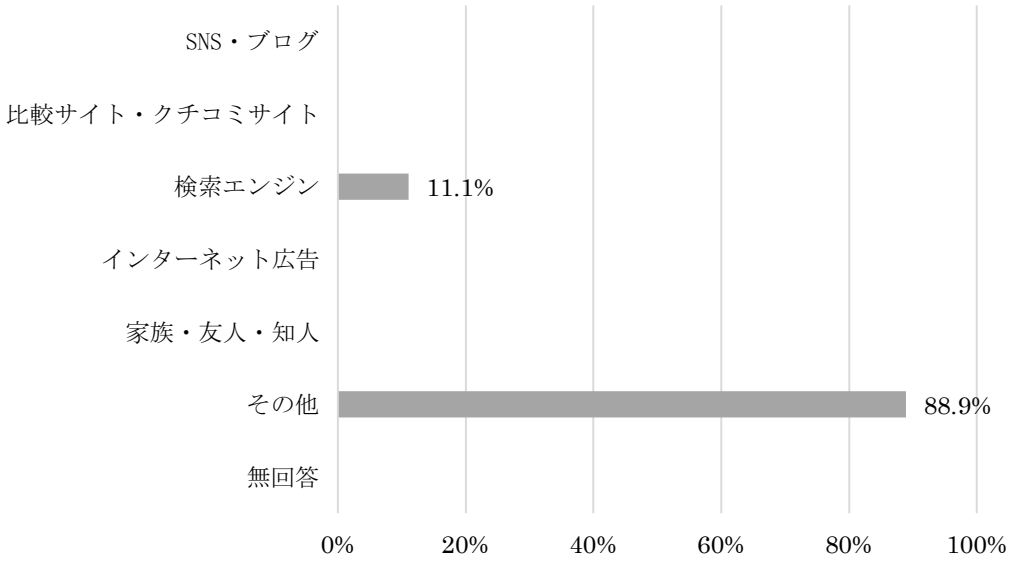

図 5　農業アルバイト生の参加のきっかけ（農業アルバイトのみ）
（2018 年度農楽会アンケートより筆者作成）

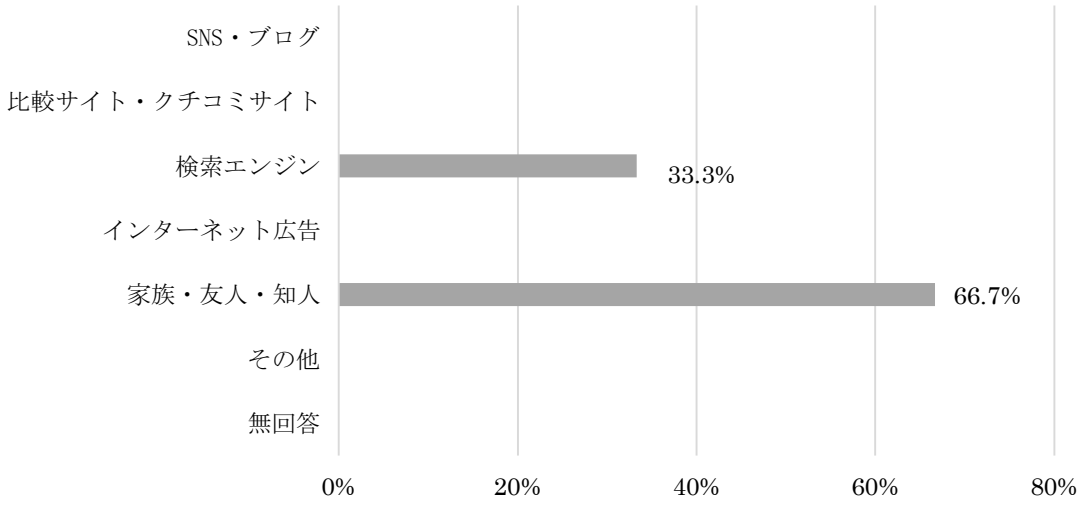

図 6　0 円免許生の参加のきっかけ
（2018 年度農楽会アンケートより筆者作成）

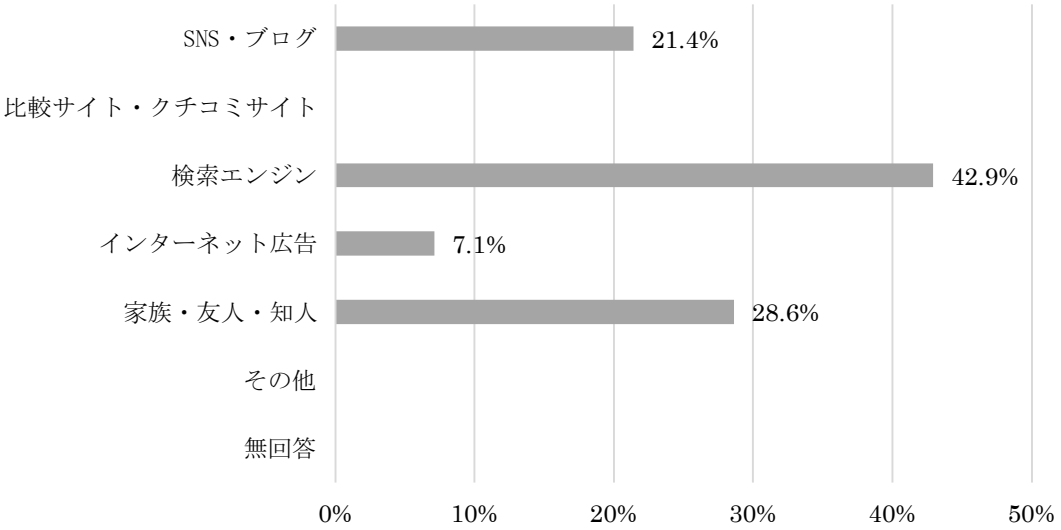

図 7　狩猟免許生の参加のきっかけ
（2018 年度農楽会アンケートより筆者作成）

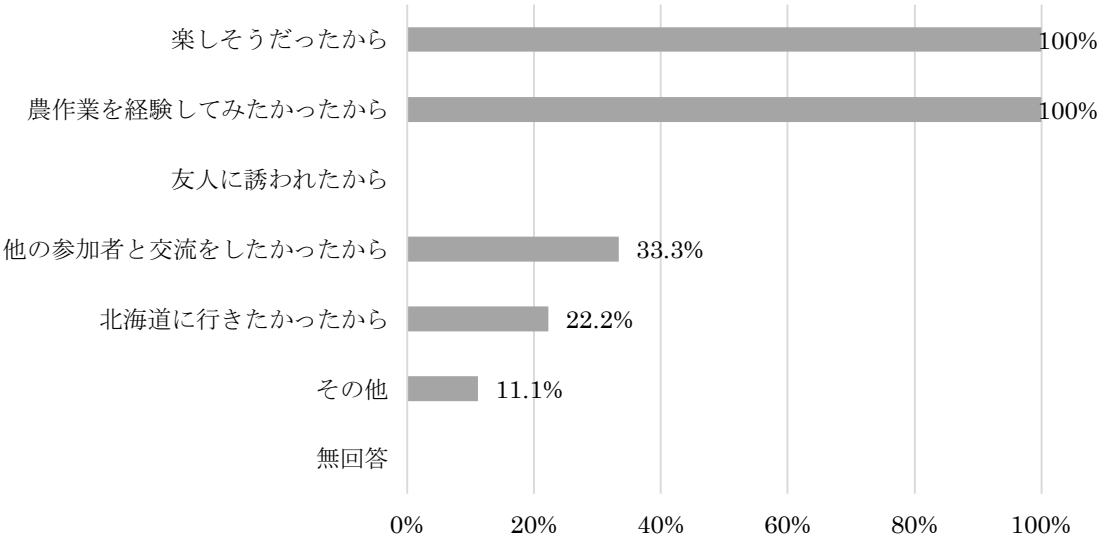

図 8　農業アルバイト生の参加理由（農業アルバイトのみ・複数回答）
（2018 年度農楽会アンケートより筆者作成）

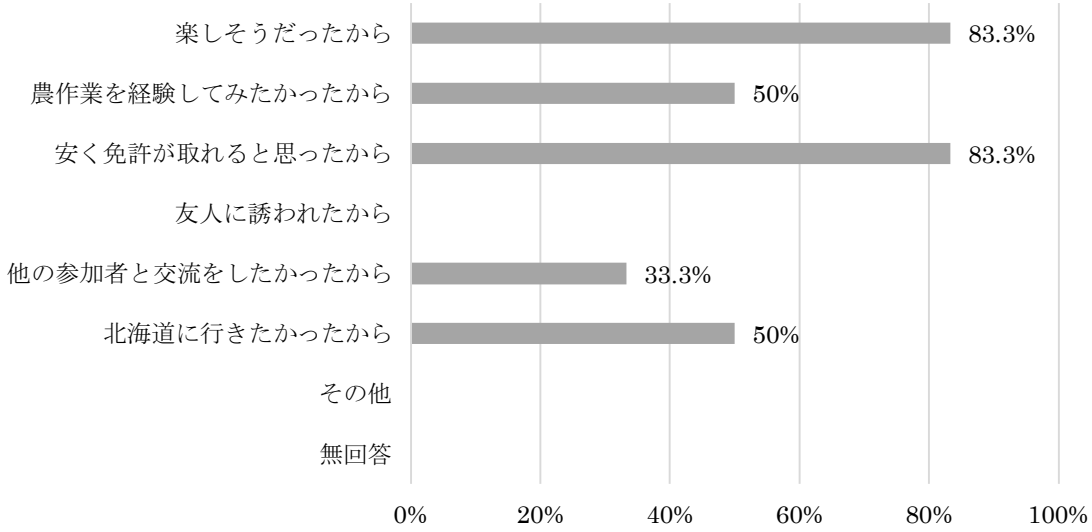

図 9　0 円免許生の参加理由（複数回答）
（2018 年度農楽会アンケートより筆者作成）

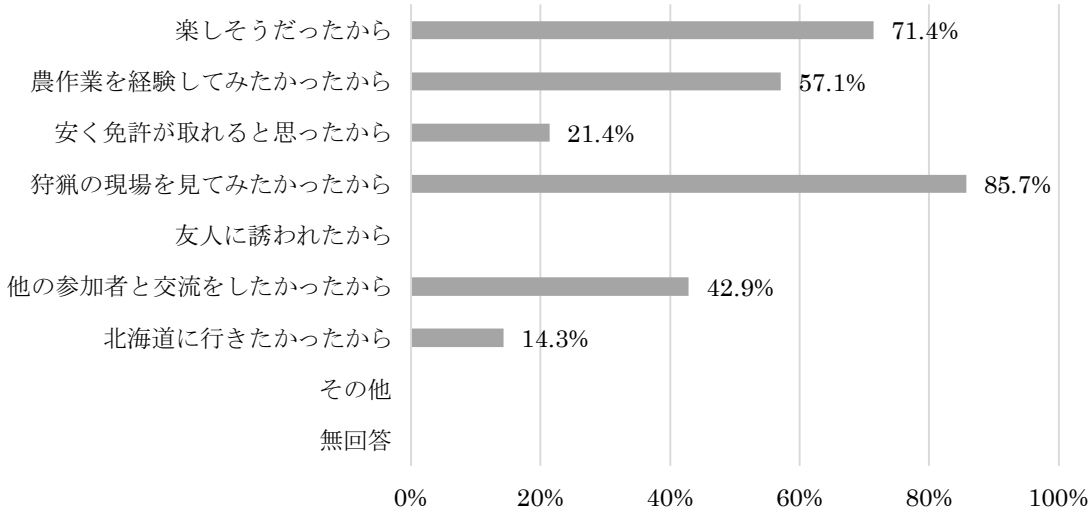

図 10　狩猟免許生の参加理由（複数回答）
（2018 年度農楽会アンケートより筆者作成）

3-2-5　なぜリピーターが生まれるのか

3-2-5-1　リピーターからみる農楽会

2019 年度はリピーターの参加が 6 名であった。なぜ彼らは、厚沢部に再び来たのであろうか。その関係の継続性を明らかにするために、本項では調査対象として農楽会のリピーターの参加者（以下、リピーター）を対象とする。参加者は基本 2 週間以上滞在するため、初参加でもその期間の中で多くの関係性を築くが、リピーターは今年度のみの参加ではなく、昨年度以前にも参加した経験を持つ参加者である。リピーターの再訪理由やリピーターが厚沢部での暮らしをどのように感じているのかについて明らかにすることで、その継続要因がより明確になると考えたため、今回はリピーターを対象とした。本項では、聞き取り調査の結果をもとに、リピーターと厚沢部の関係について記述していきたい。なお聞き取りは、リピーター6 名中 5 名に行うことができた。

3-2-5-2　農家さんとの関係

昨年、バイク免許と狩猟免許の取得を目的に参加した I さんは、今年の参加きっかけは、農家さんの事情を知ったことが関係していると語る。なお、() 内は筆者による挿入である。

> 正充さん[27]と結構連絡を取ってた。ジャガイモを送ってもらったりしてたから、こっちからもお礼のものを送ったりして。お電話いただいたり。正充さんが唐突に電話かけてきて、最近どうって。…（中略）…今年は（厚沢部での農業アルバイトは）難しいかなって思ってたけど、そのタイミングで正充さんが手術したりとか、パートのおばちゃんが辞めちゃったりって話を聞いて。今年の夏、バイクで行きたかったから行かんとこって思ってたけど、特に予定ないし楽しいから、もっかい来よって[28]。

I さんは今年の夏、バイクを購入し、その旅の途中で厚沢部に立ち寄ろうと思っていた。資金不足で購入できなかったため、今年の参加は見送ろうとしていたが、農家さんとの連絡やり取りの中で、行くことに決めたという。受け入れ農家さんと、アルバイト終了後も連絡を取り、そして農家さんの事情を知ったことが今年度の参加につながった。

一方 G さんは、滞在期間中の農家さんとの関係について次のように語っている。なお () は筆者による補足である。

---

[27] 農業アルバイト生の受け入れ農家である由利正充さんのこと。
[28] 2019 年 8 月 26 日、I さんへの聞き取りより。

雇用とかそういうのふっとばして、友達みたいな感じで喋ってくれるし、仕事もそのままの雰囲気で続けられるし…（中略）…かなりアットホームだと思います。容男[29]さんが結構、温泉に連れて行ってくれるんですよ。厚沢部町だったり、乙部の方まで車を出してくれて、ここの温泉はどうだって、ちょくちょく説明を挟んで。プライベートでも付き合ってくれる。木村さんにお世話になっている人以外でも、宿舎で暇してる人いたら、釣り行くぞみたいな感じで連れて行ってくれたりとか、僕らのお父さん（のような存在）[30]。

農業アルバイト生と農家さんの関係性は農作業中だけではない。休みの日や作業が早く終わった日には、木村さんのように農業アルバイト生と一緒に温泉に行く農家さんや、函館や江差などに行く農家さんも多い。

また昨年の農作業アルバイト中に、怪我をしてしまったという H さんは、農家さんから「また来年も来てね」と言われたことがとても嬉しかったと語っていた。怪我をして迷惑をかけてしまったが、そのように声をかけてくれる農家さんの温かさに触れたのが、とても印象的だったと語る[31]。

このように、農家さんとのアルバイト終了後もつながる関係や、アルバイト期間中の関係、農家さんの温かさや優しさが、アルバイト生の厚沢部への再訪の要因となっている。

3-2-5-3　共同生活や環境の魅力

農楽会では、農家さんの家に宿泊するようなファームステイの形態をとっておらず、宿舎で参加者が共同生活を行っているところに大きな特徴がある。I さんは農作業がやりたくて来ているわけではなく、ここの集団生活が好きだから来ていると語る。なお、（）は筆者による補足である。

農業も好きっちゃ好きだけど、機械でやって、それをみんなで分担してやるっていうのは、工場とあんまり変わらないっていうか。対象が自然なものってだけで。それがめちゃくちゃやりたくて来てるかっていうと、そうじゃないなって思って。じゃあ、なんで来てるかって言ったら、この環境というか、帰ったら他の人がいるみたいな、共同生活できる環境が（好きだから）。一緒にご飯食べるとか、一緒に夜長く話したりとか、遊んだりとかってできる環境があるからやっぱり楽しんだなって思う[32]。

---

[29] 農業アルバイト生の受け入れ農家である木村容男さんのこと。
[30] 2019 年 8 月 27 日、G さんへの聞き取りより。
[31] 2019 年 8 月 30 日、H さんへの聞き取りより。
[32] 2019 年 8 月 26 日、I さんへの聞き取りより。

農家さんの事情を聞いて参加したＩさんは、「共同生活が楽しかったから」という昨年の経験が、再び参加した要因となっている。また、共同生活が楽しいと語るリピーターは他にもいる。1 年間全国の色々な農家さんのところで、アルバイトをした経験を持つ E さんは、農楽会のアルバイト生活について次のように語っている。

帰ってきたら「今日何やったの？」「俺カボチャ」「俺ジャガイモ」「俺ブロッコリー」って感じで、それだけで盛り上がれるとこって、ここしか知らないですよ。いろいろな農家を回ってきて。そうなると、ここってやっぱりオンリーワンで。ここにしかないものって結構あるなって。…（中略）…あとここは自炊だから、それぞれの農家さんの野菜をそれぞれが持ち帰って、「たまねぎゲットしたぞ」とか、「ニンジンゲットしたぞ」とか。そういうのが魅力の一つだな[33]。

農家さんごとに作業内容が異なり、宿舎で色々な人とその内容を共有できるというのも共同生活の魅力である。また、それぞれの農家さんが野菜を沢山くださるので、宿舎は季節の野菜でいっぱいであり、普段の生活では話さないような「農作業」や「野菜」の話をする。日常生活では、スーパーに行けば手に入る野菜だが、厚沢部での生活では「人にもらう」ことが多い。このような都会にはない環境が魅力になっているのである。

また H さんは宿舎での生活について次のように語っている。

地元だったらこんな広い空を見られないし、ご飯とかも日々美味しく感じるし。…（中略）…働いて眠くもなるし、お腹もすくし。そういう当たり前のことが楽しく感じるというか。地元にいたら、アルバイトして、お金もらって、家に帰って、携帯いじったり、自分の好きな事やったりっていうのがあるけど。こっちにいたら、みんなでご飯作ったり、ご飯食べたり。みんなで寝て、みんなで掃除してって、衣食住をみんなで整えてっていうか。当たり前の事を頑張ってる[34]。

厚沢部での共同生活では、ないものが多い。ないからこそ、普段意識しない「衣食住」という当たり前のことを意識することになる。普段の生活では何か他に優先事項があり、衣食住はその隙間でしかない。ゆえにそれらが意識されないことも多い。しかし、厚沢部での生活はそれが中心なのである。よって、そのことに楽しさを感じるのだ。

近年、核家族化やライフスタイルの多様化によって、食の団らんの場は失われつつある。そして、誰かと一緒に食事をするという「共食」は減少している。内閣府のアンケート結果[35]によると、家族で食事をすることの利点について「家族とのコミュニケーションを図るこ

[33] 2019 年 8 月 27 日、E さんへの聞き取りより。
[34] 2019 年 8 月 30 日、H さんへの聞き取りより。
[35] 内閣府,「平成 29 年食育の現状と意識に関する調査」より。

とができる」が 77.7%、「楽しく食べることができる」が 64.9%となっている。このように「共食」はコミュニケーションをとる場であり、そして食事をより楽しくさせる。

厚沢部の生活で、夕食はアルバイト生の団らんの場であり、そしてそれが、「食べる」という行為自体を楽しくさせ、普段気づかない食事の楽しさに気付かされるのである。

また E さんは、厚沢部の自然について次のように語る。なお、() は筆者による補足である。

> （厚沢部には）何もないなって思ったけど、よく見たら星あるし、こんなに（都会での生活では）虫の声は聞こえないし。夕方、自転車で近くの温泉に行けば、夕焼けとか、（普段は）見られない景色がたくさんあるなって。他にもあるかもしれないけど、厚沢部で感動することが多くて[36]。

厚沢部には、都会のような娯楽はない。その分、アルバイト生は厚沢部の環境を楽しみ、普段意識しないような、自然や景色などに気付く。共同生活という特殊な環境、そして自然豊かな環境など、厚沢部での生活はそれぞれの日常とは異なる非日常空間である。このような環境が存在すること、そしてその空間を共同で作っていくことが、農楽会の魅力である。

3-2-5-4　新しいものが生まれる

また厚沢部の生活環境だけではなく、「人」の魅力について E さんと G さんは次のように語る。

> G さん：ここに集まる人が好きなんですよね。土くさい感覚の人が集まってて。
> E さん：畑が大好きで、農家さんが大好きで、農業が大好きでって人が多いもんな。
> G さん：旅人も多いし。雰囲気が好きで[37]。

農楽会に集まる人は様々であり、九州や本州からの参加者も多い。また、大学生や社会人など、出身や所属、バックグラウンドなどが様々な参加者が集まっている。このような多種多様な背景を持つ参加者が集まることで、生まれるものがあると G さんは述べている。

> この街って何もないなって思っちゃうんですよ。だけど、ここに感覚が鋭い仲間が集まると、何もないところから、何かが生まれていく。例えば、ただ農業して、ただ夜ご飯食べて喋ってだけじゃなくて、人生観だったりを共有して、新しいアイデアが生まれるって

[36] 2019 年 8 月 27 日、E さんへの聞き取りより。
[37] 2019 年 8 月 27 日、E さん、G さんへの聞き取りより。

いうのもあるし。野菜をどう使うかとか。料理できない人が料理できる人に教わってみたいな。自分ができないものを協力しあって他の人と何か作って。そういう何もないところから、何かが生まれるっていうのがこの合宿の魅力[38]。

この合宿の魅力の一つは「共有」である。料理ができる人が、苦手な人に教えながら一緒に作るなどの知識や技術の共有。そして、農業アルバイト生同士の価値観や人生観なども、夜に参加者同士のバックグラウンドや経験などを話したり、聞くことで共有される。宿舎が共同の場であるがゆえに、共有が積極的に行われ、知らなかった世界を知ることになる。G さんは、絵を描くことを仕事としているが、参加者どうしの交流から新たな発想を得ていると語る。このような様々な参加者がいること、そして交流する場があることで、新たなものが個々人の中で芽生えていくのである。

3-2-5-5　地域との関係

厚沢部町では、地区ごとに 8 月から 9 月にかけて多くの祭りが開催される。農楽会のアルバイト生は、主にアルバイト先の農家さんの居住地区のお祭りに参加する。富里地区のお祭りに参加した I さんは、

去年も行って、何人か覚えてくれてる人もいて…（中略）…僕らからしてみればこれが新鮮っていうか、こういうのはここでしか味わえない。富里以外でも、館の祭りもそうだけど[39]、みんながみんなの顔を知ってて、そういう人たちが集まる機会みたいなのが中々なくて、それがお祭りになってる。すごく面白い[40]。

一般参加者の多い祭りではなく、地区ごとの小さな祭りへの参加の機会は貴重である。お互いにお互いのことをよく知っているようなコミュニティの祭りへの参加が、I さんはとても新鮮に感じるという。このような祭りに参加できるのは厚沢部町での滞在期間とお祭りの開催日があった人だけではあるが、地域の人たちと一緒にお神輿を担いだり、ご飯を食べたりできる機会は、アルバイト生にとって地域文化を知る機会となっている。

農楽会のアルバイト生が地域の人と関わる機会は、祭りだけではない。宿舎の周りには、地域の人が住んでおり、地域の商店も何軒かある。また農業アルバイト生の受け入れは、今年で 6 年目ということもあり、地元の方もアルバイト生が毎年来ていることを認知しているようである[41]。今年度で 3 回目の参加となった E さんは、厚沢部町での生活について次

[38] 2019 年 8 月 27 日、G さんへの聞き取りより。
[39] 富里、館は厚沢部町の地区名。
[40] 2019 年 8 月 26 日、I さんへの聞き取りより。
[41] 2019 年 8 月 26 日、フィールドノートより。

のように語っている。()は筆者による補足である。

（宿舎から見て）そこに伊勢谷商店ってある。結構、お酒買いに行ったりして、そこのおばちゃんも「また来たのね」って覚えてもらったりしてて。…（中略）…3年も来てると色々覚えてもらえるっていうのと、なんかまた来たのかって言ってくれる人が増えて。こんな、1年の内で夏の間しかいないのに覚えてくれるなんて思うんで。リピーターになると、（地域の）温かみに触れるのは多くなりましたね。近所の人も「これもってけ」ってイモとか、トマトとか色々くれるし。「夜、騒がしくてすみません」って謝ると「賑やかでいいよ」って[42]。

今回、3回目の参加であったEさん。農楽会の農家さんやアルバイト生だけではなく、厚沢部の人の温かみにも触れている。それは、継続的な参加によって、Eさんの厚沢部内でのネットワークが広がっていることが関係している。一度だけではなく、何度も関わりを持つことでその地域と触れ合う要素も増えていく。その要素が増えれば増えるほど、特定のものと結びついていた関心は広がり「地域」との関係性へと発展していくと考えられる。

3-2-5-6　荒木敬仁さんの存在（農業アルバイト生と農家さんの間に立つ存在）

この農楽会の合宿生活において、農楽会事務局の荒木さんの存在は大きい。農楽会での農業アルバイトがきっかけで、家庭菜園を始めたEさんは、今年は農業を学びたいという気持ちで参加したと語る。そしてEさんに農楽会の魅力を聞いたところ、次のような回答が返ってきた。なお、()に関しては筆者の挿入である。

（農楽会の魅力は）一番は荒木さんの人柄だと思ってます。これは絶対で。なんか荒木さんにできることないかなって思って、受け入れがあったら来たいなってずっと思っているし。荒木さんのために何かできるかなっていう意思で動いてるところが結構あります。何かあの人に恩返ししたいなっていう。さっき話した（農業の）勉強っていうのも、もちろんそうだけども。何か、あの人の力になりたいっていう、そういう気持ちできました[43]。

またEさんだけではなく、Gさんも同様に農楽会の魅力を荒木さんと答えていた[44]。荒木さんがいるからこその農楽会だと、アルバイト生が感じる理由は何だろうか。

---

[42] 2019年8月27日、Eさんへの聞き取りより。
[43] 2019年8月27日、Eさんへの聞き取りより。
[44] 2019年8月27日、Gさんへの聞き取りより。

現在、厚沢部町役場に勤めながら、ボランティアで農楽会の事務局を運営している荒木さん。仕事後に、ほとんど毎日のように宿舎を訪れ、そしてアルバイト生と交流している。荒木さんに仕事後に大変ではないかと聞くと、

仕事だと思ってないんで。義務感でもないし、顔を出したくて出してるんで。そんな苦ではないですね[45]。

荒木さんは宿舎に来るたびに、参加者全員に声をかけ、表情やそして周りと打ち解けられているかどうかを見ているという。返答の様子などから悩みがありそうだと感じたら、後から話を聞くなどしている。このような荒木さんの細やかなサポートが、ここでの共同生活を支えているのである[46]。

また、農家さんと農業アルバイト生の間を取り持つ、荒木さんは次のように語っている。

私、農家じゃないから中立で聞けるんですよね。…（中略）…私は、農家の都合もわかるし、参加者がどういったことをやりたいかっていうのもわかるので、上手くバランスを取る役割かなって思いますね。農家さんはやっぱり、一生懸命、働いてくれる人に満足を感じるし、参加者はここに来てどういう体験ができるのか、どんな楽しさがあるのかっていうのに満足を感じるので、そのギャップはあるんですよね。それを理解して、うまく調整していかないと、満足度の向上にはつながらないですね[47]。

荒木さんは、農家さんが何を求めているのか、アルバイト生が何を求めているのかを理解して、その両者のバランスが取れるように動いている。確かに、農家さんは農繁期の人手が欲しいが、ただの労働力としてだけでは、アルバイト生の求めるものとの違いが生まれてしまう。荒木さんは農家さんに、農業アルバイト生は「厚沢部町のファン」になってくれる人であるということを伝えている。そして、農楽会の農家さんはそれを理解した上で、それぞれがアルバイト生と交流しているのである。

このように荒木さんという、内側の視点と外側の視点の両方を持っている人がいるからこそ、農楽会は成り立っている。

---

[45] 2019 年 8 月 29 日、荒木敬仁さんへの聞き取りより。

[46] 本文では触れていないが、2019 年度から事務局は荒木敬仁さんと妻の荒木莉香さんで運営しており、敬仁さんだけではなく莉香さんも一緒に宿舎を訪れ、アルバイト生と交流している。

[47] 2019 年 8 月 29 日、荒木敬仁さんへの聞き取りより。2018 年度の満足度は、農業アルバイト生（農業アルバイトのみ）が 100%満足、0 円免許生が 100%満足、狩猟免許生が 78.6%満足、24.6%やや満足となっており、満足度はかなり高い。

3-2-5-7　まとめ

これまで、リピーターが厚沢部での生活や農楽会などについてどのように感じているか、聞き取りデータをもとに記述してきた。そして表 4 に聞き取りの中で、農楽会に再び参加した理由と、農楽会や厚沢部について魅力的に感じることを参加要因のキーワードとしてまとめた。

リピーター全員に共通しているのは、「農家さん」との関係性である。農家さんとの交流や農作業中や農作業後の交流など、アルバイトだけではなく、プライベートでの関係性があるからこそ、農家さんに会いたいという気持ちにつながる。

また、宿舎での共同生活についてもそれぞれの視点から、魅力を感じていることがわかった。共同生活を通して参加者同士が交流し、いろいろな価値観や考え方を共有すること、そしてその交流を通して新たなものが生まれること、「楽しい空間」を参加者同士で作るという環境があるからこそ、共同生活の楽しさが生まれる。

厚沢部での生活は、都会の生活と全く異なった空間での生活で、普段の生活において当たり前だと感じてしまうことへ、焦点が当てられる。食事をみんなで囲んで食べることや、厚沢部の自然や風景など、普段は気づかない「当たり前」への気づきがここでの生活にはある。

さらに農楽会や参加者だけでその交流の輪が作られているわけではなく、祭りへの参加や、厚沢部での生活の中で地元の人との交流も生まれていることがわかった。

そして何より荒木さんという存在がいるからこそ、この合宿が参加者にとっても農家さんにとっても有意義なものになっており、だからこそ、高い満足度を保っている。

このように様々な要因が働いて、農楽会が構成されている。そして、それぞれがその要素の一つ一つに関係し、個人的な関係性が構築されることが、継続的な参加の要因になっている。

表４　リピーター参加者の参加きっかけと継続参加要因

対象者	初年度参加の目的・理由	２回目以上の参加要因（再訪要因）
E	車の運転免許を取ろうと思い、インターネットで検索した。	農業の勉強、農家さんとの関係、荒木さんのために何かしたい、共同生活、厚沢部の自然・景色、地元の人との交流。
F	別の農業アルバイトでＥさんから農楽会のことを聞き、運転免許を取りたいと思った。	昨年度の参加で狩猟免許があると知ったこと、農家さんとの関係、お祭り。
G	車の運転免許を取ろうと思い、インターネットで検索した。	参加者の個性、荒木さんの人柄、新しいものが生まれる魅力、農家さんとの関係、厚沢部の自然。
H	共同生活をしてみたかった。	日常から離れた生活がしたい、衣食住を意識した生活、農家さんとの関係。
I	友達から農楽会の話を聞き、バイク免許、狩猟免許を取得しようと思った。	農家さんとの関係、お祭り、共同生活。

（出所）農楽会リピーターへの聞き取りデータを基に作成

3-3　考察

ここで、厚沢部町農楽会のアルバイト生への聞き取り調査やアンケート結果をもとに考察していく。厚沢部町の事例では、大きく２つのことが言える。

１つ目は、「厚沢部」や「北海道」をいう土地や空間が参加者の動機につながっていないということである。参加者は、「安く免許が取れる」、「狩猟の現場がみられる」、「農作業をしてみたかった」など、農楽会を通してできること、そのものの内容を理由に挙げている。多くの参加者は、厚沢部という土地に興味を持っていたというわけではなく、農楽会のコンテンツの魅力に惹かれてきた。農業に加えて、車などの運転免許や、狩猟免許、共同生活など、その組み合わせに興味を惹かれてやってきているのだ。つまり関係人口の創出には、地域の魅力ではなく、地域で「何ができるのか」が重要である。

２つ目は、リピーターからの聞き取りから、再び参加した理由は厚沢部に行きたいわけではなく、厚沢部の「農楽会に参加したい」が理由となっている。また再訪要因には、「農家さんとの関係性」や「地域との関係性」の他に、参加者同士が作り上げる「共同生活」も大きな理由となっている。農楽会の参加者は、広域的な視点で見れば「厚沢部町」の関係人口であるかもしれないが、実際は個々人がそれぞれ魅力と感じているものは異なり、それらの要素が重なって、２回目以上の参加につながっていることがわかる。

このように、関係人口の創出段階では「地域の魅力」ではなく、「地域で何ができるか」が重要である。「何かができる場所」がその地域であり、そしてその何かが特別なものであれば、それまで地方に興味のなかった層を地域に呼ぶことができる。また、継続的な関係人口は、その関係が多様である。よって、単一要素だけで関係人口が成り立っているのではなく、複合的に要素が重なることで、関係人口は生まれるのである。

4　岩手県釜石市の事例

4-1　釜石市の概要と歴史

4-1-1　釜石市について

岩手県釜石市は岩手県南東部に位置し、リアス式海岸を持つ。鉄鋼業と漁業を基幹産業とする街であり、遠野市、大船渡市、大槌町、住田町に隣接している。また、盛岡市から車で1時間半、花巻市からは1時間のところに位置している。釜石は海岸沿いという立地から幾度となく津波による被害に直面し、その度に乗り越え復興してきた。釜石市の面積は440.34㎢、人口は33,088人[48]である。最盛期の1970年代には、約9万人近くいた人口が激減した要因の一つには、釜石市内の製鉄所の規模縮小が関係している。釜石は近代製鉄発祥の地と呼ばれ、釜石市橋野地区にある「橋野鉄鉱山」はユネスコの世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産の一つとなっているように、釜石は鉄鋼業が古くから盛んで、かつそれを中心に栄えた地域である。そして現在も日本製鉄釜石製鉄所とSMC釜石工場が市内にあるように、釜石市の重要な雇用の一つとなっている。このように釜石市の発展には鉄についての話が欠かせない。ここで少し釜石の鉄の歴史について記述していく。

図11　釜石市の位置（筆者作成）

図12　釜石市周辺の市町村（筆者作成）

[48] 2019年10月末現在の人口（釜石市HPより http：//www.city.kamaishi.iwate.jp/shisei_joho/tokei_joho/jinkou/detail/1228350_2978.html. 2019/12/02閲覧）。

4-1-2　鉄の歴史

釜石と鉄の関係は幕末まで遡る。捕鯨船の中継地として、欧米列強に開国を迫られるようになった幕末の日本は、外国船に対抗できる精度の高い大砲を鋳造する必要に迫られた。そして、1850 年に佐賀藩が反射炉[49]を完成させたことを皮切りに、江戸、薩摩、韮山、鳥取、岡山、長州など全国各地で反射炉作りが行われた。水戸藩も同様に反射炉の建設を命じ、1854 年に「那珂湊（なかみなと）反射炉」は完成した。当初、那珂湊反射炉で使用された鉄は、たたら製鉄[50]によって砂鉄から作られたものだった。しかし、反射炉作りを指導した盛岡藩士の大島高任は、砂鉄から作られた鉄の質の低さから、磁鉄鉱からの鉄が必要であると考え、故郷の釜石で磁鉄鉱からの鉄づくりに挑んだ。そして大島は、1858 年に西洋の製鉄技術と日本の在来技術を組み合わせた「日本式高炉」を築いた。その後、1880 年には釜石に官営製鉄所が設置されたものの、それはイギリスの技術をそのまま持ち込んだものであったため、銑鉄は上手くいかずに、2 年半後には閉業してしまった。

1884 年には金物商であった田中長兵衛が、官営製鉄所の払い下げを政府から打診され、田中はそれを受諾した。田中に製鉄所の経営を任された横山久太郎は、大島の「日本式高炉」を築造し、試行錯誤の結果、1886 年に銑鉄に成功した。そして 1887 年には鉱山や釜石製鉄所のすべての設備と土地を払い下げられ、釜石鉱山田中製鉄所が設立された。このように民間会社によって、釜石の製鉄は再び始まったのである。

その後、第一次世界大戦で鉄の需要は一気に高まったものの、戦争が終結したことによる戦後恐慌が 1920 年に起こったため、釜石鉱山田中製鉄所は経営が困難となり、その経営権を三井鉱山に譲渡した。三井鉱山の徹底した経営の合理化によって、経営は回復し、1934 年に日本製鉄株式会社が成立した。

日本製鉄成立後、製鉄と加工の両方を行う銑鋼一貫の工場への変貌を遂げたことで、従業員数は三井鉱山時代から 3 倍の 9,000 人へと増加した。しかし、太平洋戦争末期には原料の調達が困難となり、その生産量は減少していった。さらに 1945 年 7 月に釜石はアメリカの艦砲射撃の標的となり、工場は壊滅的な状況に追い込まれた。1950 年に日本製鉄は集中排除法により、八幡製鉄と富士製鉄に分断され、釜石は富士製鉄の製鉄所の一つとして高度経済成長にかけて成長していった。しかし、1960 年からはその規模縮小が始まり、1970 年に新日本製鉄が発足し、その釜石製作所となった。そして 1989 年に高炉を休止したために、釜石において製鉄は行われなくなり、現在は鉄加工の拠点となっている。

---

[49] 反射炉とは火炎を炉内で放射させ、1200℃～1600℃の高温を効率的に保ちながら加熱し鉱石や金属を製錬・溶解する炉のこと（茨城県観光物産協会 HP, https：//www.ibarakiguide.jp/db-kanko/id-0800000000134.html より引用　2019/12/04 閲覧）。

[50] たたら製鉄とは、砂鉄と木炭を原料に鉄を作る方法で、江戸時代以前はたたら製鉄が主流であった。

4-1-3　津波の歴史

2011 年 3 月の東日本大震災以前も、釜石は幾度となく津波の被害を被ってきた[51]。1896 年の明治三陸大津波では、6,687 人が亡くなっており、岩手県では 2 万人もの死者が出た。1933 年には昭和三陸大津波が釜石を襲った。明治三陸大津波よりも津波の高さが低かったことと、その教訓から高台移転していたことから、死者数は減少したものの、403 人が死亡もしくは行方不明となっている。その後、1952 年と 1968 年には十勝沖地震津波が、1960 年にはチリ地震津波が釜石を襲い、人的被害は出なかったものの、チリ地震津波においては、流失戸数 11 戸、全壊戸数 17 戸、半壊戸数 111 戸、浸水家屋 1,298 棟と、釜石市内の多くの家屋が被害を被り、被害総額は 6.3 億円に上った[52]。1978 年からは、世界最大級の水深 63m、総延長 1,960m の湾口防波堤の工事が始まり、2008 年に完成した。そして、2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に太平洋三陸沖でマグニチュード 9.0 の大地震が発生した。釜石市内は震度 6 弱の地震に見舞われ、釜石市内に大津波が到達した。津波の高さは 9m から 19m で、防潮堤や湾口防波堤を越えて到来した大津波によって、沿岸地域は甚大な被害を被った。関連死も含め死者数は 1,086 人、行方不明者 158 人、全壊戸数 2,957 戸、半壊戸数 698 戸、市内避難者数は 9,883 人にも登った[53]。

このように釜石は常に津波の脅威にさらされ、その被害を受けながらも、その度に復興してきたという歴史を持つ地域である。

4-2　関係人口期間から移住に至るまで

4-2-1　聞き取り対象者について

本研究では釜石市の移住者の方にお話を伺い、その移住までの間の地域との関係についてお聞きした。彼らの多くは「震災」を何らかのきっかけとして、釜石を訪れている。本節では、移住前に釜石と接点を持つ移住者の姿から、なぜ「釜石」だったのか、何との関係が移住につながったのか、釜石に来るきっかけから移住までの「関係人口期間」が移住に与える影響について、釜石に来た理由とその移住に至るまでの経緯をもとに記述する。

---

[51] 国土交通省東北地方整備局釜石港湾事務所 HP によると、歴史に残る津波の記録は、869 年、1611 年、1616 年、1676 年、1696 年、1835 年、1856 年、1896 年、1933 年。三陸沖沿岸は何度も津波の被害を受けていることがわかる（http：//www.pa.thr.mlit.go.jp/kamaishi/yakuwari/tsunami/tsunami-01.html 参照　2019/12/04 閲覧）。

[52] 三陸海岸においてのチリ地震津波の被害は、死者 61 名、流失戸数 472 戸、全壊戸数 472 戸、半壊戸数 1,100 戸、浸水家屋 4,656 棟、被害総額は岩手県全体で 82 億円。（国土交通省東北地方整備局釜石港湾事務所 HP,「チリ地震津波と被害」http：//www.pa.thr.mlit.go.jp/kamaishi/yakuwari/tsunami/tsunami-03.html 参照　2019/12/05 閲覧）。

[53] 死者数・行方不明者数は 2014 年 1 月末、家屋被害は 2012 年 2 月 1 日時点での数値（東大社研・中村尚史・玄田有史, 2014,『「持ち場」の希望学』東京大学出版会, pp.53 を参照）。

表 5　聞き取り対象者一覧

氏名	年齢[54]	釜石に初めて来た年[55]	移住した年[56]	現在の釜石での仕事・活動	聞き取り日
秋本純希さん	29	2013	2016	三陸ひとつなぎ自然学校のスタッフとして勤務。	2019/6/9
佐藤啓太さん	37	2012	2017	釜石リージョナルコーディネーターとして、釜石東部漁業管内復興市民会議（通称 NPO 法人おはこざき市民会議）で企画・運営、助成金の運用・報告などを行っている。	2019/9/5
深澤鮎美さん	33	2014	2016	自然あそび広場にここ」で森のようちえんなどを開催し、子どもの主体性を育む自然保育を推進している。釜石ローカルベンチャー1 期生。	2019/6/6, 2019/9/3
岩城一哉さん	31	2015	2017	三陸ひとつなぎ自然学校のスタッフをメインとしながら、釜石〇〇会議の委員、釜石 DMC、ラグビーW 杯開催時に行われるイベント民泊推進にも携わっている。	2019/6/8
佐藤奏子さん	40	2011	2019	スキンダイビングやフリーダイビング、スタンドアップパドルボードのインストラクター、撮影・執筆業、観光施設での業務など。	2019/9/5
細江絵梨さん	31	2011	2017	根浜マインドのコーディネーターとして活動している。 釜石ローカルベンチャー1 期生。	2019/6/7, 2019/9/5, 2019/12/5
手塚さや香さん	40	2011 (2001)	2014	釜石リージョナルコーディネーターとして、釜石地方森林組合で事務局や、企業研修・林業体験のコーディネートなどを行っている。また岩手県の移住ツアーを企画・運営する「岩手移住計画」の代表も務めている。	2019/9/9
福田学さん	41	2016	2017	「みちのくソレイユ」でサイクリングツアー、民泊事業を行っている。釜石のガイド会にも所属し、ガイドツアーも行っている。 釜石ローカルベンチャー1 期生。	2019/9/3
由木加奈子さん	25	2014	2018	釜石リージョナルコーディネーターとして、釜石地区生活応援センターで自治会組織の形成の支援を行っている。釜石市内の高校生の企画するプロジェクト支援も行っている。	2019/6/6, 2019/9/4
今井のどかさん	38	2017	2018	デザイナーとして釜石で活動。 釜石ローカルベンチャー2 期生。	2019/9/4

（出所）聞き取りデータをもとに筆者作成

54 聞き取り時の年齢。聞き取りを複数回、行っている人に関しては最初に聞き取りを行った日の年齢。
55 震災後に釜石へ来た年。() は震災以前に訪れた年。
56 住民票を釜石へ移した年。

4-2-2　交流の中での関係性

4-2-2-1　ある漁師さんとの出会い（秋本純希さん）

以下の記述は 2019 年 6 月 9 日に行った秋本純希さんへの聞き取りの内容に基づく。

東京で航空関係の仕事をしていた秋本純希さん。「震災がなかったら、岩手にも釜石にも来ることはなかったな」と、震災が東北に来る大きなきっかけとなったと語る。震災の津波の映像を見て、何かしなくてはという気持ちになり、東京発着のボランティアツアーで、陸前高田市や大槌町でボランティア活動を行った。当時は、ボランティアセンターへ行き、そこで依頼を受けた場所で黙々と作業して、ボランティアセンターに活動報告をしてホテルに帰るというスケジュールだったため、地元の人との関わりはなかった。地元の人との関係はできなかったものの、ボランティア同士の交流は生まれ、その交流はツアーが終わっても続いた。そんな中、ボランティア仲間の一人から、釜石の漁業体験のボランティアに行かないかと声をかけられ、2013 年 11 月に釜石を初めて訪れた。

ボランティアツアーを通して色々な地域で活動していたが、漁業体験ボランティア以降は釜石に行くことが多くなったという。それはある漁師さんとの出会いが大きかった。なお（）内は筆者による補足である。

> 初めて行った時は、日帰りだったの。他の陸前高田とかも周って、最終日に釜石で漁業体験をして帰るみたいな。その時の牡蠣体験の漁師さんがすごく面白い人でこの人にもう一回会いたいなって、もう一回作業したいなって（思った）。それで帰りのバスの中で、僕、また一週間後に来ますって電話して。…（中略）…今もその漁師さんとは、ウニの手伝いに行ったり、ご飯に行ったりとか（している）。（その漁師さんは）喋るの大好きだし、とにかく面白い[57]。

「ケンちゃん」と呼ばれている、その漁師さんとの活動は 1 日だけだったが、その出会いが秋本さんを釜石に引き寄せた。ケンちゃんのファンは全国にいる。キッチンカーでの牡蠣の販売を東京でケンちゃんがした時にはケンちゃんに会いたい、何かしたいという思いで手伝いに行くなど、ケンちゃんが「釜石」にいることが、秋本さんが釜石に継続的に来るようになった大きな要因である。

支援目的で集落を訪れるのであれば、住民とは「支援する（ボランティア）－支援される（住民）」の関係が生まれ、集落支援においては「役に立っている」という有用感が関与の目的となるが、継続的なボランティアはその関係にとどまらない。住民との交流を経て、互いの仕事、趣味、価値観を理解し合うことで、地域に通う理由が「役に立てる」から変化する（阿部, 2014）。秋本さんの場合は、「あの人にまた会いたいから」が理由になっている。

[57] 2019 年 6 月 9 日、秋本純希さんへの聞き取りより。

また、秋本さんは釜石でのボランティアの際は三陸ひとつなぎ自然学校 （以下、さんつな）の「さんつなハウス」に滞在した。漁業体験ボランティアは、さんつながコーディネートしているもので、そのさんつなのボランティア活動への参加者は、さんつなの事務所兼宿泊所である「さんつなハウス」に 1 泊 1000 円で滞在できる。また、8 日以上の滞在者は 1 泊 500 円など、長期滞在も可能である。このような滞在施設が整っていたことも、継続的に参加できた要因の一つである。地域内に、このような滞在拠点があることは重要である。

中塚雅也・内平隆之（2014）では、兵庫県篠山市と大学の地域連携活動において、学生が地域内に長期滞在できる農村滞在型活動拠点「篠山フィールドステーション」を整備したことが取り上げられている。この拠点によって学生がそこに滞在し、より深く地域と関わり、様々な場所で課題解決と価値創造活動が行なわれているという。

このように、地域で活動し、さらには深く関わっていくためには、外部者の滞在場所が重要である。よって「さんつなハウス」のように、長期間の滞在も可能な場所があることは、継続的に地域と関わる上で、必要不可欠である。

4-2-2-2　ボランティア活動による人間関係の広がり（佐藤啓太さん）

以下の記述は、2019 年 9 月 5 日に行った佐藤啓太さんへの聞き取り内容に基づく。

現在、釜石リージョナルコーディネーター（通称：釜援隊、以下釜援隊）として活動している佐藤啓太さん。釜援隊（かまえんたい）とは、総務省の復興支援員の制度で、「まちづくりに関わる様々な人や組織をつなぎ、官民一体の復興まちづくりを推進する『まちづくりの調整役』」としての役割を担っている[58]。なぜ、佐藤さんが釜援隊になり、釜石に移住したのか。それは、震災のボランティア活動に参加したことがきっかけであった。

震災当時体調を崩しており、休職中であった佐藤さん。休職期間を経て、会社を退社し、2012 年から震災ボランティアに参加するようになった。当時は遠野まごころネットを通して、半年間ボランティア活動を行っていた。その後、再就職してからは 2、3 か月に 1 回のペースで、週末はボランティアをするという生活が続いた。釜石だけではなく、大槌町や、山田町などいろいろな地域とマッチングしてボランティア活動を行っていたが、釜石に行くことが多くなった理由を次のように語っている。なお、（）はインタビュー内での、筆者が佐藤さんにした質問である。

ここの市民ボランティアチームのリーダーが同い年だったので、仲良くなったのがきっかけで釜石が多くなったんですね。（筆者：それまではどこに行ってたんですか？）大槌、釜石、山田とかいろんなところにマッチングして行ってたので。その時は、そんなに

[58] 釜石リージョナルコーディネーター協議会 HP 参照, http：//kamaentai.org/about (2019/12/07 閲覧)。

人とのつながりってないんですよ。作業して、帰って来る。人と会っても、その人ともう一度会うことはないじゃないですか。でも、釜石で友達ができてからは、行くたびに広がってくんですよね。…（中略）…同じ場所に行くと広がってくので、そんなことを続けているうちに、釜石で色々知り合いができて、釜援隊で働いてる人も知るようになって[59]。

佐藤さんは、ボランティアチームのリーダーと仲良くなり、「友達」となったことがきっかけで釜石に継続的に来るようになったという。秋本さんと同様に、ボランティアという活動だけでは、その地域で活動しただけで止まってしまうが、地元の人との出会いが、その地域を何度も訪れる理由となる。

ボランティアの必要条件には、自らが率先して行動し、自らの意思で行うという「自発性」、経済的な報酬を目的としない「非営利性」、他者や社会に何らかの意味で役立つことの「公共性」があると言われている（内海・中村編，2014）。さらに加えて、金子郁容（1992）はボランティア活動における自己実現や楽しさという「創造性」について、ボランティア活動中に、ネットワークを構築することがボランティアの楽しさにつながっていると述べている。

また、妹尾香織（2008）はボランティア活動を通して得る喜びや、満足感などの援助効果の要因について、①自己報酬感、②愛他的精神の高揚、③人間関係の広がりの 3 つがあることを挙げている。

「釜石で友達ができてからは、行くたびに広がっていくんですよね」と語る佐藤さんは、ボランティア活動を通して、人間関係の広がりに楽しさを見出していたからこそ、釜石に継続的に通うようになったのではないだろうか。

4-2-2-3　こすもす公園という特別な場所（深澤鮎美さん）

深澤鮎美さんについての記述は、2019 年 6 月 6 日、2019 年 9 月 3 日に深澤鮎美さんへの聞き取りの内容に基づく。なお、こすもす公園については、2019 年 6 月 7 日藤井サエ子さんの聞き取り及び、指田和『あしたがすき：釜石「こすもす公園」きぼうの壁画ものがたり』に基づいて記述していく。

埼玉県で保育士として勤務していた深澤鮎美さんは、視覚障がい者のクライミング活動をサポートする NPO 法人の活動に参加していた。この団体が被災地支援という形で、クライミングウォールを作ることになり、その活動に参加するために、深澤さんは釜石を訪れた。震災当時、運動場などの子どもの遊び場には、仮設住宅が建てられ、被災地の子供達の遊ぶ場所は少なくなっていた。それによって体力、握力が落ちているという問題もあり、クライミングウォールを作るに至った。プロジェクト名は「こすもすウォールプロジェクト」。釜

[59] 2019 年 9 月 5 日、佐藤啓太さんへの聞き取りより。

石市内のこすもす公園にクライミングウォールは作られた。3 枚のウォールのうち、2 枚目の制作に関わった深澤さん。2 枚目のウォールの資金集めから始め、その集まったお金で 2014 年のゴールデンウィークにクライミングウォールのコンクリート作りから行い、さらにウォールの壁に絵を描いた。翌月の 6 月には仕上げのため、再びこすもす公園を訪れた。また、毎年 6 月にはこすもす公園でキャンドルナイトが開催され、深澤さんはその手伝いもするようになった。そして、そのあとも、こすもす公園のイベントがあるたびに通うようになった。

深澤さんが惹きつけられた「こすもす公園」とはどのような場所なのだろうか。

こすもす公園は、「創作農家こすもす」の敷地にある公園である。「創作農家こすもす」は、藤井了さん、サエ子さんご夫妻が経営するレストランで、2007 年にオープンした。もともと、こすもす公園は田んぼで、転作で播いた種がコスモスの種だった。東日本大震災の影響で子どもの遊び場が少なくなっている現状を知り、コスモス畑を子どもの遊び場にしようと 2012 年に公園を仮オープンさせた。公園内の遊具は、ボランティアの人との手作りで、公園の背後の壁にはカラフルな絵が描かれている。ある一人の女の子が壁を見て「津波みたい」と言ったことがきっかけで、壁に絵を描いて、公園を明るくしようという「壁画プロジェクト」で描かれた絵である。壁画の製作に関わった人は述べ 500 人で、幅 43 メートル、高さ 8 メートルの壁には、約 1 年かけてペンキが塗られた。

図 13　こすもすウォールプロジェクトで作られたクライミングウォールの 1 つ（2019/6/7 筆者撮影）

図 14　こすもす公園概観　（2019/6/7 筆者撮影）

深澤さんはこすもす公園との関わりについて次のように述べている。なお（）は筆者の補足である。

私、釜石行くとこすもす（公園）しか行かなかった。こすもす公園にしか行かないで帰って、またそこにしか行かないみたいな。…（中略）…こすもす（公園）は非現実世界（のような空間）だから、リフレッシュっていうか（そこに行くことが）自分にとっての楽しみになっていた。仕事も、こすもす（公園に）行けるから、頑張ろうみたいなね[60]。

深澤さんは、釜石に行っていたというよりも「こすもす公園」に行っていたと語っている。こすもす公園という空間と、藤井さんご夫婦を始め、そこに集まる人々との交流が、深澤さんを釜石へと向かわせた。このようにその人にとって特別な場所が、地域にあることがその土地へと人を惹きつけるようだ。

また、こすもす公園に継続的に通う中で、釜石〇〇会議[61]に参加したことも移住につながったという。いろいろなチームがそれぞれがやりたいことを実現させて、最終発表でどのようなことを行ったかについて活動報告している姿を見て、「自分も参加してみたい。移住しても楽しいだろう」と感じたという。さらに、深澤さんは釜石と継続的に関わる中で、食育やパーマカルチャーなど、自分のやりたいことができると感じたことも移住を決める要因になったと語る。こすもす公園を超えて、釜石〇〇会議に参加する多様な釜石の人に出会える機会があったこと、そして継続的な関わりの中で、釜石において自分の興味のある分野に関わりを持てることに気づいたことも移住に大きくつながった。

4-2-3　長期滞在の中での変化

4-2-3-1　子どもたちと関わりたい（岩城一哉さん）

以下の内容は、2019 年 6 月 8 日に岩城一哉さんへ行った聞き取りの内容に基づく。

埼玉県の学童保育所に勤務していたという岩城一哉さん。その学童保育所は、東北の学童施設に支援しており、東北の学童の先生方の話を伺う機会も多かったという。その中で、被災地の現実と埼玉で生活している中での認識にずれがあることを感じ、また子どもたちに東北の現実を伝えようと決意した。子ども支援を行っている団体でかつ、長期で受け入れているのが三陸ひとつなぎ自然学校だったことから 2015 年 5 月から釜石でのインターンシップが始まった。当初は、1 年間のうち半分は釜石でボランティアして、半分は日本を旅し

[60] 2019 年 9 月 3 日、深澤鮎美さんへの聞き取りより。
[61] 釜石〇〇会議とは、釜石内の若者が自分のやりたいことをプロジェクトにして、実現する場である。2014 年の「釜石百人会議」が前身となって、2015 年 3 月からスタートした。

ようという計画だったという。しかし、そのインターンシップから、釜石にそのまま移住した理由を岩城さんは次のように話す。()は筆者の補足部分である。

震災をきっかけにたくさんのボランティアさんが来ていて、結構（子どもたちはボランティアさんとの）出会いもあったと。それこそ関係人口となるボランティアさんが、全員かといったらそうじゃないじゃないですか。…（中略）…当時小学校2年生の女の子が、「またねって言ってもみんな来ないじゃん」って言っていて。「嘘つきだ」って言っているのを聞いて、自分は長くいたからといって、終わりにしちゃいけないな、みたいなのは自分の中で（感じていて）。もうちょっと長くいようと。仕事始めて、また行こうとしても、行けないなと（思った）[62]。

子どもたちと関わり、震災の現実を伝えたいという思いで来たと話す岩城さん。子どもたちの言葉が、岩城さんを釜石にひきとめた。またそれだけではなく、ある一人の女子高生とその高校生が発案したプロジェクトとの出会いも衝撃的だったと話す。仮設住宅を大人が「仮設」と呼び、「家」と呼ばないことに違和感を感じた高校生が、仮設住宅を家と呼べるような場所にしようと始めたのが「マグネットぬりえプロジェクト」だった。そのような頑張る高校生の姿や、20代の若者が釜石のために活動することを目的とした「20代でつながろうぜの会」の存在、釜石以外から釜石のために何かしたいと来る大学生の姿、地元の人たちの温かさや釜石の自然など、長期で滞在する中で釜石の様々な魅力に気づいた岩城さんは、

全て重なったことが、残った理由[63]。

と語る。岩城さんは、長期インターンシップを終えて、現在はさんつなスタッフ、釜石〇〇会議の実行委員、ラグビーW杯2019の民泊推進に携わるなど様々な分野で釜石に関わっている。「半年で帰ろう」と思っていた釜石の滞在は5年目を迎え、最初の目的だった釜石の今を子どもたちに伝える活動は「がんちゃん通信」を通して今も続けている。長期的に滞在することで、「子どもたち」、「高校生」、「大学生」、「釜石のやる気のある同年代」、「地元の人」などの様々な出会いと交流、そして様々な関係の広がりが岩城さんと釜石をつないでいる。

[62] 2019年6月8日、岩城一哉さんへの聞き取りより。
[63] 2019年6月8日、岩城一哉さんへの聞き取りより。

4-2-3-2　緊急支援から移住へ（佐藤奏子さん）

以下の記述は、2019 年 9 月 5 日に佐藤奏子さんへ行った聞き取りの内容に基づく。

佐藤奏子さんは、震災時、廃油からバイオディーゼル燃料を作って地球を車で走る活動に参加しており、岩手県花巻市にいた。そして、緊急支援で最初に訪れたのが釜石市だった。ガソリンが手に入り難い状況であったが、バイオディーゼル燃料を自分たちで作ることができたため、花巻の住民の方に天ぷら油などの廃油や農家の方から水や物資をもらい、釜石へ向かった。当時の状況について佐藤さんは、

> 当時は凄まじい状況だったんですよね…（中略）…それを毎日見ていたら人生が変わってしまったんですよね。何のために生きてるのかとか、価値観が変わったというか。…（中略）…ガソリンがないけれど、物資が運べるので、とにかくできることをやろうっていう感じだったんですよね。だから、我が身を振り返る余裕もなかった[64]。

必死にボランティア活動を続け、そして復旧段階からまちづくりの段階に変化していった時に、自分たちがやってきた自然再生エネルギーや環境のことを考慮した取り組みを釜石のまちづくりに活かせるのではないかと感じ、自然の流れで移住した。当時の凄まじい状況から、復旧、復興という釜石の変化を支援しながら、見続けてきた佐藤さん。釜石の人について、以下のように語っている。

> 私たちは外からのボランティア活動だから、地元の人ではありません。地元の方との関係に入れてもらえなければ、活動が難しいと思います。地元の方が快く受け入れてくださったり、温かく迎えて協力してくださったり、助けてくださったりということがあったので。そうして支えられて活動や生活ができていました[65]。

釜石の人が受け入れてくださったことで、活動が継続できたという佐藤さん。釜石は、外の人と釜石の人が一緒になって町を作っていこうとする「オープンシティ」を推進している。釜石の歴史と文化の特徴は、製鉄業や災害からの復興など、「外部との関係を重視した社会を構築している点」にあり、そしてそれによって「開放的なローカル・アイデンティティ」が形成されたところにある（中村, 2009）。このような歴史的に培われた、地域の個性が釜石の「よそ者」への寛容さを生んでいる。

---

[64] 2019 年 9 月 5 日、佐藤奏子さんへの聞き取りより。
[65] 2019 年 9 月 5 日、佐藤奏子さんへの聞き取りより。

4-2-4　岩手への関心

4-2-4-1　暮らしや文化への関心（細江絵梨さん）

以下の記述は、2019 年 6 月 7 日、2019 年 9 月 5 日、 2019 年 12 月 5 日の細江絵梨さんへの聞き取りに基づく。そのうち、2019 年 12 月 5 日においては電話インタビューを行った。

2012 年に震災復興支援のボランティアで岩手に来た細江絵梨さん。当時は内陸から沿岸部に物資の支援やボランティアのコーディネートを行っていた。当初は 1、2 か月の滞在予定で、長期的に関わろうとは思っていなかった。しかし、関わる中でその思いは変化していった。

> すぐ帰ろうと思ってたんだけど、楽しくなっちゃって。東京での暮らしって、自分の役割って本当に一部分で、誰のおかげで成り立ってるとか見えないじゃない。こっちだと、一次産業から三次産業までのつながりとか、郷土芸能とかで地域の絆を保っているだとか。そのあり方がすごいと思って[66]。

細江さんはボランティア活動を行う中で、東京と岩手の暮らしの違いを感じ、それに面白さを感じたと言う。ボランティア活動後すぐに、東京でイベントやセミナーなどで岩手の情報発信や支援したいボランティアや企業のマッチングを行う一般社団法人に就職した。そして、その団体を通して、津波によって神輿や虎舞を保管していた建物や練習場もすべて流されてしまった、釜石市鵜住居地区の郷土芸能支援[67]も行った。その団体では、釜石以外にも郷土芸能の支援を行っていたため、仕事を通して岩手県の郷土芸能にも興味を持ったという。そして、2013 年から 2017 年の移住前まで、中間支援という形で岩手と関わり続ける中で、細江さんは現地で活動していないことに違和感を感じたと語る。なお、（）内は筆者による挿入である。

> 中間支援をしていて、これって本当に現場にとって意味があるのかなとか、被災地の支援、東北の支援という名目で関わり始めたけど、がっつり現場に入ることはしてなかったのね。ボランティアコーディネートとか物資支援とかで入っていたけどそれが終わって、なんか自分たちがやっていた中間支援がこれでいいのかなって疑問を持っていて。そういう中で、しっかり現場を見なきゃなって、何のためにやっているかってことを突き詰めたいなと思って（釜石に移住した）[68]。

---

[66] 2019 年 6 月 7 日、細江絵梨さんへの聞き取りより。
[67] 釜石には「虎舞」が江戸時代（一説には鎌倉時代）から伝えられており、釜石市内に 14 の団体がある（釜石観光物産協会 HP,「虎舞」, http：//ci.nii.ac.jp より　2019/12/05 閲覧）。
[68] 2019 年 6 月 7 日、細江絵梨さんへの聞き取りより。

指出一正（2016）は、東日本大震災の起こった 2011 年について、「東北という価値観を若者が発見した年であり、同時に一次産業の大切さや魅力を彼らが知った年」だと述べている。東日本大震災は、多くの若者を東北の地へと向かわせ、そして新たな価値観を多くの若者にもたらした。

細江さんも同様に、岩手との関わりの中で、東京にはない東北という地域での暮らしや、郷土芸能をはじめとする地域の文化に魅力を感じた。それが長期的に関わる大きなきっかけとなった。長期的に東京と岩手を往復しながら、地域と人をつなぐ役割を果たしてきた細江さんは、自分も現場で活動しようと思い、移住を決意した。短期の滞在予定が、長期的な関わりとなり、その関わりが自分自身の生き方を考えることにつながった。

4-2-4-2　一次産業への関心（手塚さや香さん）

以下の記述については、2019 年 9 月 9 日の手塚さや香さんへの聞き取り内容に基づく。

震災以前から仕事を通して岩手と関わりがあり、震災後は仕事やボランティア活動を通して岩手と関わってきた手塚さや香さんは、釜石に移住するまでの 13 年半、記者として新聞社に勤務していた。東日本大震災時、大阪本社に勤務していた手塚さんは、2011 年 4 月に陸前高田市のボランティアに参加した。2、3 か月に 1 回のペースでボランティアや仕事で取材を行う中で、手塚さんは一次産業に関心を持った。

> 震災後もいろんな地域に入っていく中で、漁師さんだったり、地域の方と話すと、こういう、中山間地域や漁村を支えているのは一次産業を担っている人たちなんですよね。…（中略）…漁業に限らないんですけど、その地域でやっていこうっていう人たちがいるからこそ、どこの地域も復興が進んできたと思うんですよね。こういう地域社会を支えていく生業として、一次産業の役割って大きいよなって思ったんですよね[69]。

盛岡支局に勤務しながら、手塚さんは復興にどう関わるか、そして岩手の一次産業の魅力を広めるために何ができるか考えたという。手塚さんは、岩手の一次産業のブランドイメージがあまりないことに課題を感じていた。いいものがたくさんあるにもかかわらず、その PR があまり上手くいっていないという一次産業の現状。一次産業に関わる人に魅力を感じた手塚さんは、一次産業に貢献できるような仕事ができないかと考えていた。そして関わり方を模索している中で、見つけたのが釜援隊だった。

手塚さんは、仕事の関係で偶然岩手に来たことがきっかけとなり、岩手に関心を持つようになった。特に初任地の盛岡については次のように語っている。() は筆者による補足である。

---

[69] 2019 年 9 月 9 日の手塚さや香さんへの聞き取りより。

盛岡っていう町が本当にいい街なんですよね。盛岡って人口が 30 万くらいの大きい街なんですけど、街中の川に鮭が上ってきたり、子供たちが（川で）泳いでたり、すぐそこに石垣があって、公園になってたりとか、南部鉄器の工房があったりとか…（中略）…盛岡みたいに町の中心部を歩いて、南部鉄器みたいな文化的なものもあるっていうのが魅力でしたね[70]。

手塚さんにとって、盛岡は特別な場所である。大学生まで埼玉で生活していた手塚さんの目に、岩手県の持つ資源はより魅力的に映った。震災前に盛岡で生活していたこと、盛岡への愛着が、震災のボランティア参加につながり、そして仕事を通して多くの沿岸の一次産業に関わっている人との出会いが、釜石とつながった。

移住するまで、あまり釜石とは関わりがなかったという手塚さんは、「釜石」の関係人口ではなく、「盛岡」や「岩手県」、岩手の「一次産業」の関係人口であったと言える。関係人口は特定の狭い範囲の地域で表現することが多いが、手塚さんのように広く関わる中で、より広域な範囲で、愛着を抱く人もいるのではないだろうか。また、手塚さんは仕事がきっかけで岩手に来たが、その生活の中で岩手に深い関心を持った。このように、仕事での転勤がきっかけでその地域に赴任することになり、その地域の魅力を知るケースもある。

4-2-4-3　自分のルーツと移住の模索（福田学さん）

以下の内容については、9 月 3 日に行った福田学さんへの聞き取りに基づく。

福田学さんは、東京都出身であるが、母の実家が岩手県一関市だったことから、幼少期から、一関に来る機会が多かった。震災当時、自分のルーツである岩手が津波の被害を受けている映像を見て、何かしなくてはという気持ちに駆られたが、当時の職場においては長期休暇が取れるような状況ではなかったために断念した。そしてそれが大きな心残りになり、その分、岩手への思いは強まった。転機になったのは 2016 年のふるさと回帰支援センターで行われた「北東北移住セミナー」だった。移住セミナーにも積極的に参加し、手塚さや香さんなどの釜石の移住者と出会った。また「わかすフェス」という年に 1 回、東京で開催される岩手県 PR のイベントにも参加し、そこでも釜石の人に出会い、釜石の話を聞く中で、福田さんは釜石に興味を持った。そして、2016 年の夏に一関に帰省した際に、岩手県沿岸部を旅したという。

その旅で、タクシーの運転手さんに連れて行ってもらったのが尾崎白浜だった。そこで見た夕日がとても印象的で、それが福田さんの移住を決意させたという。その魅力を生かすためにサイクルツーリズムで釜石の自然や魅力を知ってもらおうと考え、釜石ローカルベンチャーに応募した。福田さんは、その時の旅行以外で、釜石に来たことはなかったが、夕日

[70] 2019 年 9 月 9 日の手塚さや香さんへの聞き取りより。

以外の移住の要因については、

いろんな人とのつながりができたから、釜石に行ってみようと。釜石は自分にとっては知らない場所だったけど、知り合いがいるなら安心して移住できるなっていうのもあったので[71]。

と語る。東京で釜石の人との出会い、そして実際に釜石を旅の途中で訪れ、美しい景色と出会ったことが釜石への移住につながった。福田さんの岩手への愛着は幼い頃からあり、そしてそのふるさとへの思いは、東日本大震災でより深まった。「岩手」という広範囲の地域への関心が釜石に向いたのは、東京で開催される岩手県のイベントやセミナーに参加することによって、釜石の人と出会いがあったことであり、それが福田さんと釜石の関係を生んだ。

4-2-5　関わりの可能性

4-2-5-1　高校生のプロジェクトに関わる中で（由木加奈子さん）

以下の記述は、2019年6月6日、2019年9月4日に行った由木加奈子さんへの聞き取り内容に基づく。

現在、釜援隊として活動する由木加奈子さんは、大学1年生のときから、大学の学生団体が主催するスタディツアーのボランティアとして釜石に来ていた。来るきっかけは、友達にその参加を誘われたからだという。当時は、東北や復興支援についてあまり知らず、知らないがゆえに関心がなかった。大学1、2年生の間は年3回のボランティアツアーに一般参加者として参加し、大学3年生では、そのボランティアツアーを主宰する学生団体に入った。学生団体に所属しつつ、大学4年生の時には、大学のサービス・ラーニングの授業で高校生と大学生が一緒に企画を作るプロジェクトに関わった。そして、高校生の実体験をもとにした津波に関する紙芝居とクイズを小学生にするという企画を、高校生とともに実現させた。そのプロジェクトを通して感じたのは「ステージの変化」だったという。それについて由木さんは次のように語っている。なお（）内は筆者の補足部分である。

その時に感じたのは、ボランティアとして（大学生が）メディアに注目されたことはあったけど、地元の高校生がメディアに注目されているのを見て、ステージが変わったなって（感じた）。外からの人間じゃなく、自分たちの街のためにとか、地元の人が立ち上がるのが復興だと感じて。でもその一方で、私たちと出会わなかったらその企画なかったなって。外だからこそできることがあるんじゃないかと感じて、外から現地の人たち、地域

[71] 2019 年 9 月 3 日、福田学さんへの聞き取りより。

の人たちが街を作っていくのをサポートできるみたいな、そういう関わり方をできればと。その時は、高校生と関わりたいって気持ちが強かった[72]。

当初は、ボランティアに興味がなかった由木さんだったが、4 年間釜石と関わり続けた。そして「高校生のプロジェクト」がきっかけで、高校生とかかわる中で釜石への思いが高まり、3 月に入って釜援隊への応募を決意した。現在は釜援隊として釜石内の自治会組織の形成サポートをしている。また、釜援隊としての業務を行いながら、高校生のプロジェクトにもコーディネーターとして関わり続けている。

由木さんが関係人口としての関わりの中で見えてきたものは、「街の変化」とそして「よそ者」だからこその役割があるということだった。2-3 よそ者の必要性でも述べたが、敷田麻実（2009）は、地域づくりにおいてよそ者がもたらす効果を①技術や知識の地域への移入、②地域の持つ独創性の惹起や励起、③地域の持つ知識の表出支援、④地域（や組織）の変容の促進、⑤しがらみのない立場からの問題解決と整理している。由木さんのいう「外だからこそできることがある」とは、敷田麻実のいうよそ者効果であろう。

また高校生との関わりに加えて、震災から 10 年目を関わりながら見届けたいという気持ちもあったという由木さん。震災から 10 年目は区切りの年である。釜石と関わり、高校生と出会い、さらに震災から 10 年目を見届けたいという思いが生まれた。それはステージの変化とよそ者としての役割を関わりの中で実感したことが大きいだろう。関係人口として関わる中で、由木さんの釜石への意識は大きく変化した。

4-2-5-2　釜石の余白への気づき（今井のどかさん）

以下の内容は 2019 年 9 月 4 日の今井のどかさんへの聞き取り内容に基づいて記述する。

今井のどかさんは、東京のカバンメーカーでデザインの仕事を行いながら、プロボノ[73]の活動に参加していた。そして、プロボノの活動を通して出会った友人に誘われ、「寺子屋プロジェクト」に参加した。「寺子屋プロジェクト」とは、東京の若者が地方の課題解決をサポートするというものである。プロジェクトの対象地域は釜石であり、そのプロジェクトの中で今井さんは実際に釜石を訪れ、移住者の方のプレゼンを聞いたり、実際に釜石ローカルベンチャーの人の事業を体験した。その時、釜石について感じたことを今井さんは、次のように語っている。

---

[72] 2019 年 6 月 6 日、由木加奈子さんへの聞き取りより。

[73] 「プロボノ」とは、「公共善のために」を意味するラテン語「Pro Bono Publico」を語源とする言葉で、【社会的・公共的な目的のために、職業上のスキルや専門的知識を生かしたボランティア活動】のことである（認定 NPO 法人サービスグラント HP, https：//www.servicegrant.or.jp/program/ より引用 2019/12/06 閲覧）。

釜石って遠野とか、宮古とか気仙沼みたいに、ザ・水産業とか、ザ・里山とか一言で言えない、つかみどころがない感じがしていて。だけど掘れば、いいところがいっぱいあるだろうなって。…（中略）…それが余白っていうか。それを言ってあげる必要性を感じたので[74]。

寺子屋プロジェクトで釜石を訪れた今井さんは、釜石の可能性を感じたという。移住者が多い地域は、すでにその魅力が認知されているが、釜石はまだまだその魅力が知られていないため、よその人が釜石の魅力を伝える必要性を感じたと語る。当時、フリーランスで活動したいと考えており、タイミングが重なり、翌年には釜石へ移住した。なお、()内は筆者による挿入である。

今まで自分がやってきたスキルが生かせつつ、（釜石には）デザイナーさんがいないから、来たらいいことがあるだろうなって、直感的に思って来ましたね[75]。

釜石にプロジェクトという形で関わり、そしてそこで釜石の余白を感じたという。プロジェクトを通して、実際に地域に足を運び、そこの課題を感じるとともに、自分のスキルを当てはめたことが釜石への移住へとつながった。

松永桂子（2016）は地域について、「個人にとっては、地域や社会に貢献するよりも、自分がしたいことと地域の課題解決の方向性をすりあわせていく、そうした社会デザイン能力が花開く場として地域が受け皿となっているようである。…（中略）…これからは、仕事の場、雇用の場がある地域よりも、なにかしら新たな仕事をつくっていくことのできる土壌に、意識や志の高い人びとが引き寄せられていくのではないだろうか」と述べている。

今井さんはまさに、地域課題と自分のスキルがマッチングしていることを、関係人口という関わりの中で感じたのではないだろうか。今井さんは、起業型地域おこし協力隊「ローカルベンチャー」の制度で釜石に移住した。ローカルベンチャーなどでの起業を志す人にとっては、関係人口などの関わりを持つことで、より具体的に自分のビジョンを描けることにつながる。

このように関係人口期間は、移住後に踏む課題発見のステップを早い段階で見つけられるという可能性がある。

---

[74] 2019年9月4日、今井のどかさんへの聞き取りより。
[75] 2019年9月4日、今井のどかさんへの聞き取りより。

4-3　考察

本章では、釜石の関係人口期間を経て、移住した移住者の関係人口期間の類似事例について「交流の中での関係性」、「長期滞在の中での変化」、「岩手への関心」、「関わりの可能性」の 4 つに分けて記述した。また、事例を表 6 にまとめた。

「交流の中での関係性」からは、それぞれが特定の地域の誰かと出会ったことが、継続的に釜石に通うことになったことがわかる。そして当初の目的のボランティア活動から、誰かに会いたい、あの場所に行きたいというように目的が大きく変化している。釜石の移住者の多くは東日本大震災をきっかけとして、釜石を訪れている。しかし、「釜石」という地域に関心を持って訪れたわけではなく、多くが「ボランティア」という形で震災復興に携わるために訪れている。ボランティアとして関わる中で地域の人と出会い、交流が生まれることで継続的な関係人口となっているのである。そしてその関係性が持続するためには、個人と地域内の人、場所、コミュニティなどの要素との結びつきが重要である。

「長期滞在の中での変化」からは、釜石に長期的に滞在する中で、地域内との関係性が広がることで移住に至っている。また 4-2-3-2 では、釜石のローカル・アイデンティティについて触れている。釜石は、鉄や津波などの特殊な歴史を持ち、その意識が長い期間をかけて培われているがゆえに、よそ者への寛容さが地域の特色になっている。このように関係人口創出には、よそ者に寛容な地域の雰囲気というものも重要であろう。

「岩手への関心」からは、「釜石」の関係人口としてではなく、「岩手」に対する関心が関係人口を作ることもわかった。今回、「岩手」に関心を持っていた移住者は、震災以前から関わりを持っていた、もしくは震災後に関わりを持ち、かつ広範囲で活動しているという特徴を持っている。市町村といった、特定の狭い範囲の地域ではなく、広い範囲への愛着や関心も関係人口に含まれる。関係人口とは、愛着や関心を持つことで生まれる。そうであるならば、特定の都道府県への関心も関係人口となる。都道府県レベルで関心を寄せる人も関係人口として注目していくべきだろう。

「関わりの可能性」や 4 章全体を通して、関係人口期間は移住に大きくつながることも明らかになった。表 6 からわかるように、移住要因の多くは関係人口として関わる中で、生まれている。また「関わりの可能性」においては、関係人口期間で、よそ者の視点で地域を見ることが、地域課題や自らの地域における立ち位置の把握につながることがわかった。小田切徳美（2017）が示す「関わりの階段」のように、関係人口という関わりで移住のハードルが大きく下がる。関係人口期間を通して、地域のことをよく知る、地域の人との関係性の構築、さらに地域内の課題の把握と自らの関わりを想像できるといった点において、関係人口という関わり方は有効である。関係人口は移住を目的としないことが重要であるが、移住前に深く地域と関われることで、移住のマッチングミスを減らす可能性もある。図司直也（2013）は、地域おこし協力隊などの地域サポート人材事業は、地域への入り口として重要なマッチングの場であると論じている。移住する以前に地域と関わることは、地域側と移

住者側がリスクの低い状態でお互いを知ることができる。よって、関係人口期間は「移住」においても重要である。

表 6　聞き取りまとめ

氏名	岩手・釜石と関わったきっかけ	目的	継続要因	移住要因	関係
秋本純希さん	被災地支援のボランティアとして岩手県陸前高田市や大槌町でがれき撤去などを行った。ボランティア仲間に釜石の漁業体験ボランティアに誘われて、釜石市に来た。	震災復興ボランティア活動	漁師さんに会いたい	ボランティアを通しての交流の中で決意	漁師さん、釜石の人
佐藤啓太さん	被災地支援のボランティアとして岩手県大槌町、山田町、釜石市のボランティアとしてがれき撤去や泥出しなどを行った。	震災復興ボランティア活動	ボランティアを通しての友人関係の広がりが楽しい	ボランティアを通しての交流の中で決意	ボランティアチームのリーダー、ボランティア関係者、移住者
深澤鮎美さん	東京で所属していた NPO 法人のクライミングウォールプロジェクトが釜石市のこすもす公園で行われた。	震災関連のプロジェクト	こすもす公園に行きたい	こすもす公園で自分のやりたいことができる	こすもす公園、釜石〇〇会議、釜石の人
岩城一哉さん	子どもに関わるの長期ボランティアを受け入れていたのが釜石市の一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校だった。	子ども支援のボランティア活動	子どもに関わり続けたい		子ども、高校生、大学生、釜石の人
佐藤奏子さん	花巻市で被災し、緊急支援で釜石の支援を行った。	震災復興ボランティア活動	緊急支援からまちづくりまで関わる中で循環型のまちにしたいと思った		釜石の人、まちづくり

氏名	岩手・釜石と関わるきっかけ （東日本大震災後）	目的	関係継続要因	移住要因	関係
細江絵梨さん	被災地支援のボランティアで盛岡から陸前高田市や大槌町、釜石市に物資を運ぶボランティア活動を行った。	震災復興ボランティア活動	都会との暮らしの違いに魅力を感じた	中間支援ではなく、現場で活動したい	岩手の暮らし、伝統芸能
手塚さや香さん	震災前に仕事で盛岡に勤務していた。震災後にボランティアや仕事で陸前高田市や大槌町へ。	震災復興ボランティア活動・取材	岩手への愛着	一次産業に関わりたい	一次産業、文化、盛岡
福田学さん	母の実家が岩手県一関市で、幼少期から長期休みは岩手で過ごす。震災がきっかけで、岩手への移住を決意。都内のイベントやセミナーで釜石の人と出会い、興味を持つ。	移住	岩手への愛着	尾崎白浜の夕日、釜石の友人	一関、釜石の人、尾崎白浜
由木加奈子さん	釜石のスタディツアーへの参加を友人に誘われた。	スタディツアー	定期的にスタディツアーが開催されていた	高校生に関わりたい、震災 10 年目を見届けたい	高校生
今井のどかさん	友人に誘われ、地域活性化事業「寺子屋プロジェクト」に参加した。	地域活性化事業	寺子屋プロジェクト	釜石で自分のスキルを生かせる	釜石の潜在的な魅力

（出所）聞き取りデータより筆者作成

5　まとめ

筒井一伸（2018）は、京都市北部山間かがやき隊（地域おこし協力隊）小林悠歩氏の図に加筆して図 15 を作成し、田園回帰と外部人材のタイプを整理している。厚沢部と釜石の事例を図 15 に当てはめて考えたい。厚沢部の事例は体験から協働段階、釜石の事例は体験から移住まで当てはまる。本研究から、「体験」・「協働」での両者の共通点については次のことが言える。

「体験」の段階はまさに、関係人口が創出される段階である。そして、事例から関係人口創出段階において、「地域」そのものは創出のきっかけにならないことがわかった。厚沢部の農楽会の事例であれば、厚沢部に来る動機は、車の免許や狩猟免許を取得したい、農作業を体験してみたいなど、厚沢部という土地や空間ではなく、そこで何ができるのか、個人の関心や興味が重要視されていた。また、釜石の事例においても、多くは東日本大震災のボランティア活動をきっかけとしてはいるが、「釜石」だから震災支援を行ったわけではなく、震災支援の対象地域の一つとしての「釜石」であったことがきっかけとなっている。また、子どもに関わるボランティアを行うことを目的とし、その受け入れ条件が当てはまったのが釜石であったという事例からも、個人の目的を達成できる場所が釜石であったことが、地域に来るきっかけとなっていることがわかる。

「協働」の段階は、地域に「継続的に通う」段階である。関係人口が継続的にその地域に通うようになるには地域と個人の「関係」がいかに生まれているかが重要である。厚沢部の事例からは、農家さんとの関係や、農業アルバイト生同士の関係、荒木さんとの関係、祭りを通しての地域の人との関係など様々な関係があり、それが一つではなく、複数存在することでリピーターが生まれていることがわかった。また、釜石の事例からも、ボランティア活動を通して出会った人との関係や、特別な場所との関係、岩手の文化や暮らしとの関係など、個人が持つ地域との関係は、人、場所、コミュニティなど様々であることがわかった。そして、その関係性の中で生まれるものも関係の大きな要素であることがわかる。例えば、厚沢部であれば、農楽会の共同生活という人が集う空間で生まれる魅力もある。また釜石で言えば、釜石〇〇会議や、高校生のプロジェクトなど、人が集まり、何かをすることで生まれるものがあり、それに魅かれることで関係性が深まる。

釜石の事例における「地域サポート」の段階においては、地域と関わりながら、地域における自らの立ち位置や役割の確認ができ、移住後に踏むステップを移住前に踏むことができることが明らかになった。高校生に関わりたい、自分のスキルを活かせるなど、実際に現地で関わる中で、自分が地域でやりたいこと、自分が地域でできることが明確化するのである。

このように、体験、協働、地域サポートの段階で関係人口の地域との関係性は変化していることがわかる。体験の段階では、個人の興味・関心が大きな動機として働きその地域との接点が生まれる。協働の段階では、体験段階で構築された個人と地域内の要素との関係性が

継続につながる。そして継続の中で、地域内での自らの立ち位置・関わり方が明らかになり、地域サポートの段階へと、個人と地域の関係は変化・発展していくのである。

よって関係人口とは、多様な関係を地域内の要素と結ぶ中で、生まれてくるものなのである。2 章で、都市農村交流について触れたが、これまでの都市と農村をつなぐ取り組むの多くが、今の関係人口創出と同様の取り組みである。関係人口創出という、地域づくりの担い手になる者をつくることを目的とせず、多くの者が地域との接点を持てる機会によって、関係人口は自然と生まれるのである。「都市農村交流」から「関係人口」への転換という、言葉は変化しているものの、その本質は同じである。今後、多様な関係が生まれる、その接点がいかに増やせるかが重要である。

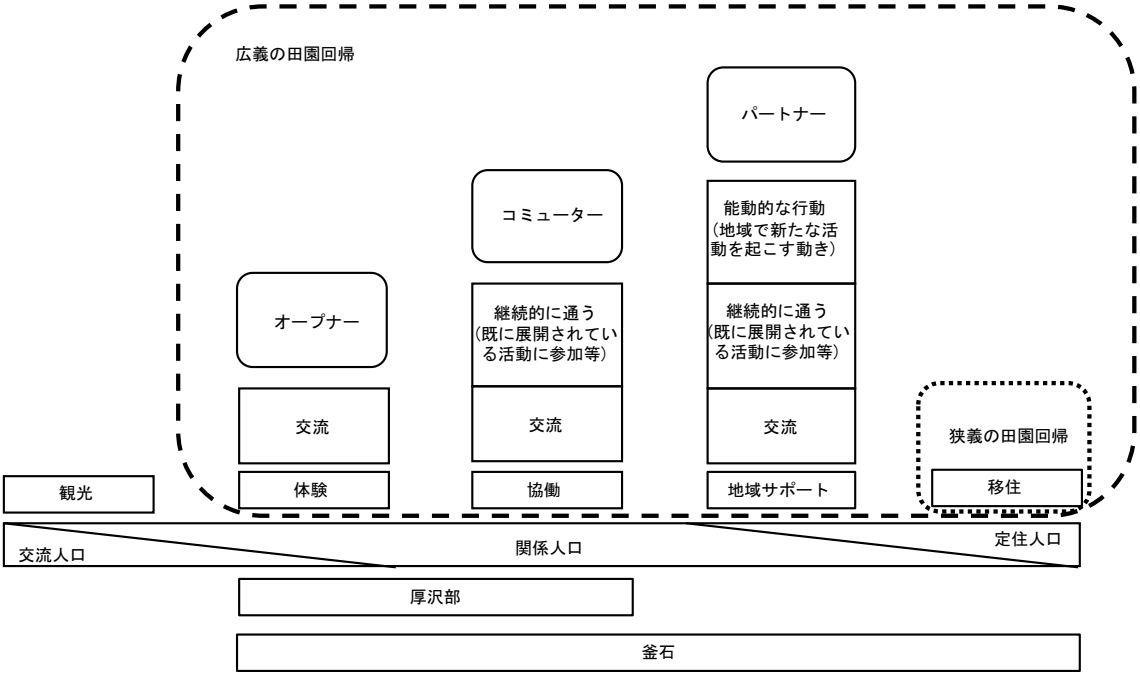

図 15　田園回帰と外部人材タイプ
（京都市北部山間かがやき隊小林悠歩氏作成、筒井一伸加筆の図に筆者加筆）

6　おわりに

少子高齢化により地域の過疎化が進み、日本の地方は危機的な状況にある。人口減少に拍車が掛かる一方で、田園回帰という農村への関心も生まれている。その流れの中で生まれたのが関係人口である。近年、地方創生のキーワードとして注目が集まる関係人口であるが、その創出の取り組みでは「地域」との関係や関心が重要視されている。しかし、実際は地域に関わることを目的として、その関係は生まれているのだろうか。今回は関係人口の「関係」に着目して、個人が地域の持つ要素とどのような関係を結んでいるのか明らかにしてきた。

関係人口の関係は、その創出段階では地域の魅力ではなく、個人的な興味・関心がきっかけとなっている。そして、そのきっかけから、継続的な関係性へと変化するには、個人と地域内の要素とのつながりが生まれていることが重要である。また、その継続的な関係が、地域での自らの立ち位置や関わり方の発見につながる。

関係人口創出においては、地域に関わりたいが移住までは踏み切れない人の地域づくりへの参画が目的であり、ターゲット層も地域に何かしらの関心を抱いている層である。しかし、これから関係人口を地域へ巻き込んでいくならば、その目的を明確化することで、地域への無関心層も地域に関心を寄せることになるだろう。また、関係人口期間は「移住」にとっても重要である。地域との関わりのハードルが下がる「関係人口」という期間に、いかに地域と接点を持ち、地域の人との関係性を構築できるか。そして、地域課題を発見できるかなど、移住後に踏むステップを移住前に経験でき、マッチング期間にもなるという点において、関係人口という関わりは重要である。また、本文では触れなかったものの、移住の決め手は移住後の行政サポートや、地域おこし協力隊の仕組みなど制度的な面も大きい。よって今後、行政の取り組みがますます重要になってくるだろう。

7　参考文献・参考 URL

赤坂憲雄, 1985,『異人論序説』砂子屋書房.

秋津元輝, 2002,「多様化する農業者のかたち」『食・農・からだの社会学』新曜社, pp.124-141.

秋津元輝, 2011,「グリーン・ツーリズム」『新版キーワードで読みとく現代農業と食料・環境』昭和堂, pp.124-125.

安達生恒, 1970,「過疎の実態：過疎とは何か、そこで何がおきているか」『ジュリスト』455：21-25.

井口梓, 2012,「『田舎暮らし』の特徴とその変遷」『日本地理学会発表要旨集』2012a(0).

伊藤洋志, 2017, 『ナリワイをつくる：人生を盗まれない働き方』筑摩書房.

伊藤洋志・pha,2018,『フルサトを作る：帰れば食うに困らない場所を持つ暮らし方』筑摩書房.

阿部巧, 2014,「震災復興から地域づくりへ」『震災復興が語る農山村再生：地域づくりの本質』コモンズ, pp.218-235.

井上真, 2004,『コモンズの思想を求めて：カリマンタンの森で考える』岩波書店.

内海成治・中村安秀 編, 2014,『新ボランティア学のすすめ：支援する/されるフィールドで何を学ぶか』昭和堂.

岡崎京子・後藤春彦・山崎義人, 2004,「U ターン者増加の過程における転入要因の変遷: 宮崎県西米良村を事例として」『都市計画.別冊,都市計画論文集』(39):25-30.

小川全夫, 1996,「都市・農村交流の歴史とこれまでの成果：持続的交流にむけて」『農林統計調査』46(11):4-10.

小田切徳美, 2009,『農山村再生：「限界集落」問題を超えて』岩波書店.

小田切徳美, 2013,「農山村再生の戦略と政策：総括と展望」『農山村再生に挑む：理論から実践まで』岩波書店.

小田切徳美, 2014,『農山村は消滅しない』岩波書店.

小田切徳美, 2015,「田園回帰を時代のターニングポイントに」『季刊地域』(21):106-107.

小田切徳美, 2016,「田園回帰元年」『田園回帰の過去・現在・未来：移住者と創る新しい農山村』農林漁業文化協会.

小田切徳美・筒井一伸編, 2016, 『田園回帰の過去・現在・未来：移住者と創る新しい農山村』農林漁業文化協会.

小田切徳美, 日本農業新聞,「『農村関係人口』の可能性」2017 年 6 月 4 日付朝刊.

小田切徳美, 2018,「関係人口という未来：背景・意義・政策　(特集「関係人口」と自治体　：人口対策・第三の道)」『ガバナンス』202:14-17.

金子郁容, 1992,『ボランティア：もうひとつの情報社会』岩波書店.

川手督也, 2011,「むらの変貌と農村社会再編の展望 ： 連帯経済の構築と自給の再評価」『農村計画学会誌』30(1):36-39.
鬼頭秀一, 1998,「環境運動／環境理念研究における「よそ者」論の射程—諫早湾と奄美大島の「自然の権利」訴訟の事例を中心に—」『環境社会学研究』4(0):44-59.
齋藤朱未, 2014,「都市農村交流に関する研究動向と今後の展開」『農村計画学会誌』33(3):343-348.
作野広和, 2016,「地方移住の広まりと地域対応：地方圏からみた「田園回帰」の捉え方（特集：地方創生と経済地理学）『経済地理学年報』62(4):324-345.
佐藤真弓, 2009,「都市と農村の交流に関する研究動向」『改革時代の農業政策』農林統計出版株式会社.
指田和（文）・阿部恭子（絵）, 2016,『あしたがすき：釜石「こすもす公園」きぼうの壁画ものがたり』ポプラ社.
指出一正, 2016,『ぼくらは地方で幸せを見つける：ソトコト流ローカル再生論』ポプラ社.
塩見直紀, 2014,『半農半 X という生き方』筑摩書房.
敷田麻実, 2005,「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『江渟の久爾』(50):74-85.
敷田麻実, 2009,「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』9:79-100.
図司直也, 2013,「地域サポート人材の政策的背景と評価軸の検討」『農村計画学会誌』32(3):350-353.
図司直也, 2014,『地域サポート人材による農山村再生』筑波書房.
図司直也, 2014,「若者はなぜ農山村に向かうのか：「里山」資源が生み出すなりわいづくりの可能性（特集「里山資本主義」を考える）」『地域開発』(603):11-14.
妹尾香織, 2008,「若者におけるボランティア活動とその経験効果」『花園大学社会福祉学部研究紀要』16:35-42.
高橋博之, 2016,『都市と地方をかきまぜる：「食べる通信」の奇跡』光文社.
立川雅司, 2005,「ポスト生産主義への移行と農村に対する『まなざし』の変容」『消費される農村：ポスト生産主義下の「新たな農村問題」』農山漁村文化協会, pp.7-40.
田中輝美, 2017,『よそ者と創る新しい農山村』筑波書房.
田中輝美, 2017,『関係人口をつくる：定住でも交流でもないローカルイノベーション』木楽舎.
玉村雅敏・小島敏明編, 2016,『東川スタイル：人口 8000 人のまちが共創する未来の価値基準』産学社.
筒井一伸, 2013,「地域自立の政策」『農山村再生に挑む：理論から実践まで』岩波書店.
筒井一伸, 2018,「田園回帰の潮流にみる農山村の未来（特集：未来の農村をデザインする）」『農業と経済』84(9):25-34.
筒井一伸・嵩和雄・佐久間康富, 2014,『移住者の地域起業による農山村再生』筑波書房.

筒井一伸・嵩和雄・佐久間康富, 2015,「都市から農山村への移住と地域再生：移住者の起業・継業の視点から」『農村計画学会誌』34(1):45-50.
中塚雅也・内平隆之, 2014,『大学・大学生と農山村再生』筑波書房.
中村尚司, 2003,「参加型学問としての民俗学と開発・差別：当事者主義と〈よそ者〉参加」『参加型開発の再検討』アジア経済研究所.
沼尾波子 編, 2016,『交響する都市と農山村：対流型社会が生まれる』農林漁業文化協会.
野田直人, 2000,「外部者は資源である」,『開発フィールドワーカー』築地書館, pp.92-93.
林直樹・齋藤晋 編, 2010,『撤退の農村計画 ： 過疎地域からはじまる戦略的再編』学芸出版社.
桝潟俊子・松村和則 編, 2002,『食・農・からだの社会学』新曜社.
増田寛也, 2014,『地方消滅：東京一極集中が招く人口急減』中央公論新社.
増田萬孝, 1999,「農村の免疫力と自己再生の条件」『農業および園芸』74(10):1049-1055.
松永桂子, 2015,『ローカル志向の時代：働き方、産業、経済を考えるヒント』光文社.
松永桂子・尾野寛明, 2016,『ローカルに生きるソーシャルに働く』農林漁業文化協会.
宮口侗廸, 2007,『新・地域を活かす』原書房.
森戸哲, 2001,「都市と農村の共生を考える ： 交流活動の現場から」『農村計画学会誌』20(3):170-174.
山田晴義, 2011,「農村移住による農村再生のための計画的課題と展望」『農村計画学会誌』29(4):414-417.
山下祐介, 2014,『地方消滅の罠：「増田レポート」と人口減少社会の正体』筑摩書房.
蘭信三, 1994,「都市移住者の人口還流」『都市移住の社会学』世界思想社, pp.165-198.
東大社研・中村尚史・玄田有史 編, 2009,『希望の再生：釜石の歴史と産業が語るもの』東京大学出版会.
東大社研・中村尚史・玄田有史 編, 2014,『「持ち場」の希望学：釜石と震災、もう一つの記憶』東京大学出版会.
日本村落研究学会 編, 2008,『グリーン・ツーリズムの新展開：農村再編戦略としての都市・農村交流の課題』農山漁村文化協会.
新日本製鉄, 1981,『鉄と日本人：鉄の話題・鉄の歴史』新日本製鉄株式会社.
厚沢部町役場総務政策課, 2017,『厚沢部町町勢要覧』.
釜石市, 2018,「釜石市オープンシティ戦略」.
国立社会保障・人口問題研究所, 2017,「日本の将来推計人口（平成 29 年推計）報告書」.
内閣府, 2017,「平成 29 年食育の現状と意識に関する調査」
総務省, 2017,「都市部の住民の意識調査」,「「田園回帰」に関する調査研究中間報告書」.
総務省, 2019,「平成 30 年度「「関係人口」創出事業」モデル事業調査報告書」.
総務省関係人口ポートルサイト http：//www.soumu.go.jp/kankeijinkou/ (2019/11/25 最終閲覧).

農林水産省「「グリーン・ツーリズム」とは」
http：//www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/k_gt/ (2019/11/25 最終閲覧).
農林水産省「「農山漁村余暇法」について」http：
//www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/kyose_tairyu/k_gt/yokaho.html (2019/11/25 最終閲覧).
農林水産省「市町村の姿　グラフと統計でみる農林水産業　厚沢部町」
http：//www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/01/363/details.html
(2019/11/30 最終閲覧).
国土交通省「住み続けられる国土専門委員会」http：//www.mlit.go.jp/policy/shingikai/kok]
(2019/12/05 最終閲覧).
特定非営利活動法人地球緑化センター
http：//www.n-gec.org/activities/furusato.html (2019/11/25 最終閲覧).
北海道厚沢部町移住・定住＆観光情報総合サイト「厚沢部町について」
https：//www.sutekinakaso.com/about/ (2019/11/30 最終閲覧).
国土交通省東北地方整備局釜石港湾事務所 HP「チリ地震津波と被害」
http：//www.pa.thr.mlit.go.jp/kamaishi/yakuwari/tsunami/tsunami-03.html
(2019/12/05 最終閲覧).
三陸ひとつなぎ自然学校 HP http：//santsuna.com (2019/12/05 最終閲覧).
釜石観光物産協会 HP「虎舞」http：//ci.nii.ac.jp (2019/12/05 最終閲覧).
釜石リージョナルコーディネーター協議会 HP, http：//kamaentai.org/about
(2019/12/07 最終閲覧).
釜石ローカルベンチャーHP http：//opencitykamaishi.jp/localventure/ (2019/12/06 最終閲覧).
総務省統計局,https：//www.stat.go.jp/data/jinsui/new.html (2019/12/08 最終閲覧).
茨城県観光物産協会 HP https：//www.ibarakiguide.jp/db-kanko/id-0800000000134.html
(2019/12/04 最終閲覧).
認定 NPO 法人サービスグラント HP https：//www.servicegrant.or.jp/program/
(2019/12/06 最終閲覧).
時事ドットコムニュース,「地方創生へ「関係人口」拡大＝先端技術活用も一政府基本方針
案」, https：//www.jiji.com/jc/article?k=2019061100878&g=pol(2019/12/08 最終閲覧).
MACHI LOG ,「ソトコト編集長 指出一正氏 地域の活動を増やす「関係人口」とは？」,
https://machi-log.net/?p=59424(2019/12/15 最終閲覧).

謝辞

本研究の調査に協力していただきました厚沢部町農楽会の皆様、2019 年度参加の農業アルバイト生の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。また、三陸ひとつなぎ自然学校、釜石リージョナルコーディネーター協議会、釜石ローカルベンチャーコミュニティの皆様をはじめ、釜石の多くの方に調査に協力していただきました。厚く御礼申し上げます。

本論文を作成するにあたりまして、様々なご指導をいただきました北海道大学文学部地域科学研究室の宮内泰介先生をはじめ、地域科学研究室の皆様にも大変お世話になりました。ありがとうございました。また、本研究への助言をいただきました北海道大学農学部農業経済学科の小林国之先生や小林ゼミの皆様、査読をしていただきました京都大学農学研究科の土屋憧真様にも、この場を借りて感謝申し上げます。